
神人な恋人

有沢 美弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神人な恋人

【Nコード】

N4893E

【作者名】

有沢 美弥

【あらすじ】

四神の一人が自分の中にいると告げられた少女。そして、その神に恋をしてしまう。四人の人間と四人の神で神界を救う物語。波瀾万丈なストーリー。

一章：第一話

これは…

夢か現か…

乳白色のようにぼやけている世界。

その中にも在る色。

妙にはっきりしている…

鮮やかな薄氷色。
アイスマルト

其処に佇む人 ?

『あなた…誰…?』

くぐもった声が辺りに響く。

答えはまだ、無い。

じっと目を凝らすとそれがはっきり見えてくるような感覚に捕らわれた。

『一体誰なの…?あなたはいつも此処にいる…?』

再度、問う。

すると、透き通った声が答えた。

『まだ…気づかないのか？』

気づく…？

何を…？

『私は…』

第二話

「あ………」

また目覚めてしまった…

何度も見る夢。

朝起きるといつも疑問に思う。

あの薄氷色アイスクリームの中アイスにいる、あれは一体何なのか。

「沙羅サラ、起きてるのー？」

一階から母の声が聞こえてきた。

彼女の名前は沙羅。

中学三年生。

「沙羅ーっ？」

「起きてますーっ！」

再度問われた事に少々苛立つ。

トントンと身軽に階段を下りる。

朝食と取りながらも、考えはまとまらない。

あの夢を見るのは初めてではない。

むしろ、毎日見ている気がする。

最近考え事が多くなった気がする。

あの夢のせいなのか。

どうしても気になる…

学校でも授業にならない。

ずっと頭がはつきりしない。

すると、一人の少女が問いかけてきた。

「あなた…沙羅さんですよね？」

中学生とは思えないほどの愛らしさ。

髪は肩くらいまでで。軽く結ってあった。

「そう…だけど。あなたこそ誰？」

沙羅は訝しそうに見上げた。

椅子に座っている沙羅よりも少し顔の位置が高くくらいだから、とても小さいのだろう。

「二年二組の藤川 愛美です。少しお伺いしたいことがあって…」

沙羅は少し考えた後、分かったと言って廊下に出た。

「聞きたい事って？」

「単刀直入に聞いてもいいですか？」

「いったいこの子は何が言いたいのだろう。」

藤川 愛美と名乗ったこの子に違和感を覚えた。

「沙羅さん。四神って知っていますか？」

「四神…」

「知っていますね？」

「聞いたことはあるけど…実際何なのかは知らないわ」

「神です」

「は？」

それは…

四神と言っているのだから、四つの神だとは分かる。

それが一体何なのか。

「それで？」

その先を聞き出そうと、言葉を促す。

「お願いがあります。川内先輩を呼んで下さい」

「は？」

再びあっけにとられる。

一体何なのだろう。

言われるままに川内純を呼んだ。

純とは同じクラスである。

仲も決して悪くはない。

むしろ、良い方だった。

なにか引かれ会うものを感じていた。

「よお。藤川じゃん。沙羅、知ってんのか？」

純は教室のドアにもたれ掛かって立っていた。

「純こそ知ってるの？この子」

「いや…三年の中でも結構有名な子だぜ。何しろ…」

「川内先輩。私からお話したいのですが」

純が何か言おうとしたのを遮った。

「すげ…先輩の話中断出来る奴ってそうそういねえな」

純は一人で感心していた。

「私は巫女です。沙羅さん。協力して頂きたいことがあります」

「巫女お？中二で？ふざけてるでしょ？」

「真面目な話だぜ、沙羅」

純が横から釘を刺した。

「は？本当なの？」

「ああ。こいつん家は代々神社を継いでるんだ」

「よく…知ってるわね」

沙羅は目を丸くした。

「はい。私の父は神主をしています。叔母様は素晴らしい巫女だったと聞いています」

「だった？」

はい、と少し瞳を伏せた。

「叔母様は異世界にお行きになりました」

沙羅の頭は限界が近かった。

何を訳の分からない事をいつているんだと…
異世界？

「もういい加減にしてくれない？藤川さん」

「冗談だと思いですか？」

「信じる、と言う方が無理だろ」

純も同意する。

「信じて頂けないと困ります」

それでは、と言って質問してきた。

「あなた方は、不思議な夢を御覧になりませんか？」

「それっ！」

「それは!!！」

沙羅と純は同時に声を上げた。

「え…?」

二人は互いに顔を見合わせた。

「やはりそうでしたか…」

愛美は一人で納得していた。

「あれの正体を知っているの!？」

沙羅は声を荒げた。

「はい…おそらくは、としか分かりませんが…」

「教える、今すぐだ」

そう純が言った瞬間、チャイムが鳴った。

わらわらと生徒が教室に駆け込んで行く。

「場所を変えましょうか」

第三話

「……屋上？」

今日は青空がとても綺麗だった。

「そんな事はどうだっていい。早く夢の正体を教えろ」

「はい。おそらく、沙羅さんは蒼。川内さんは玄の光がありませんか？」

「そう……だけど。何で……」

「四神です」

沙羅は顔を勢いよく上げた。

「何言つて……」

「おそらくは、青龍」

「俺は？」

純は落ち着いた口調で聞いた。

「玄武でしょう」

すると、純はくつと、喉の奥で笑った。

「純？」

「ああ……何となく分かってたんだけどな……はつきりしなくて」

「分かってた……？」

「聞いたんだ。夢で。それに、助けてもらったし」

そう言つて少し天を仰いだ。

「夢で『誰だ？』って何回も聞いた。そしたら、『我は四神の……』
つて言つたんだ」

「助けてもらった……って？」

「俺がまだ……ちっちゃい頃。車に跳ねられそうになって……気づいたら車だけ大変な事になってたんだ」

「私も……ずっと見てた。その夢」

「四神は人の体を在^{あじか}刃とします。そのため、その主^{あるじ}が意識しない限りは霊体としてもこの世には出て来れません」
愛美はゆっくりと語り出した。

「東西南北を司る四神はそれぞれに意味があります。東は青龍。西は白虎。南は朱雀。北は玄武。つまり、あなた方の他^{あるじ}にまだ二人主がいることになります。

「じゃあ、私の中には東の神がいるってこと？」

「ああ。そういうことだな。それで……」

純は愛美と向き合った。

「どうしたら俺は玄武に会える？」

すると、愛美は無表情にペンダントを二つ取り出した。

「何？」

沙羅が尋ねると、その一つを沙羅に渡してきた。

大きさは直径二センチくらいの丸。色は金で、表には蒼色で五芒星・桔梗印が掘ってあった。裏返すと何か文字が書いてある。

「ん……これ……せい……」

「待って」

裏の文字を読もうとした時、愛美が止めた。

「やってみればわかりますが、声^{せいどく}読すると神界に飛びます」

「飛ぶ？」

「俺はやってみるぜ」

純は右手の人差し指で裏の文字に触れた。

そうして、言った。

『 玄武 』

「っあー!!」

いきなり吹いた突風に沙羅は右腕で目をかばう。

一瞬、漆黒の光が純を包んだ気がした。

「純!?!」

沙羅が気づいたときにはもう純は居なかった。

「行きましたね」

愛美は天を仰ぎながら言った。

「神界って何…？」

沙羅は呟いた。

「もう何がなんだか分かんないよ……」

沙羅はしゃがみ込んだ。

「実際に行ってください。青龍様が待っています」

「……………」

動きたくない…

その刹那

「!?!」

空耳…？

今、龍が啼いた。

沙羅はゆっくりと立ち上がった。

そして、呟く。

『 青龍 』

第四話

一瞬、気を失ったかと思った。

否、身が軽くなったと言うべきか。

あまりの気持ちよさに沙羅は、目を瞑った。

すると、少し重力を感じる。

「っ……」

地に足が着いたのか？

思わずよろける。

そつと目を開ければ、夢で見た乳白色の世界だった。

「わ……」

夢で見るよりもずっと綺麗で、見入ってしまった。

そのとき、背後から声をかけられる。

「随分と遅かったな」

「んなつ!?!」

咄嗟に振り返ると誰かが立っていた。

「あなた……」

「まさか……俺が分かんない、とか無いだろうな」

「その声!」

沙羅は思わず声を上げてしまった。

聞き覚えのあるその声は、夢で聞いた声。

「じ……じゃあ、あなたが青龍……」

その少年の背丈は大きく、身長160センチの沙羅を悠々と抜いていた。

軽く頭を持ち上げなければ話せない。

少年の前髪は長く、脇に寄せてあった。

また、後ろ髪も同様に長く、漆黒の髪は高い位置で一つに結い上げてあった。

着物は紅あかの陰陽師のような身なりだった。

彼は、^{フィルブルー}薄氷色の光を纏っており、やはり夢の人だと確信する。

「青龍」

沙羅は話を切り出した。

「一体、あなたは何なの？何がしたいの？」

「俺か？まあ、率直に言えばここを守ってほしい」

「……？」

再度、あたりを見回す。

「馬鹿。神界のことだ」

「って言われても、神界がどこだか知らないし。第一、守るって何よ」

それに…と言葉を続けた。

「私には関係ない。神界がどうなるうと私は困らないじゃない」

「お前…本気で言ってるのか？」

青龍の顔つきが変わった。

すると、いきなり沙羅の腕を掴んだ。

「った…」

予想外の力の強さに顔を歪める。

「来い。神界を見せてやる」

「ちょ…っ…」

ぐらりと視界が回った。

ふっと腕が放された。沙羅はその腕をさすりながら立ち上がった。

「え……？」

目の前に現れたのは楽園としか言いようのない風景だった。

「すごい…」

圧倒される。

「これ…楽園みたい…」

青空に花畑。それに、沢山の子供達。

「これ…平和としか…」

「平和に見える、か…やはり、人間だな」

「ちょっと、何よ!」

青龍の勝手な物言いに憤慨する。

「ここは平和かもしれない…だが、これの正反対も在るのだ」

「正反対…？」

「この子供らは人間界で死んだ子達だ。守護霊となるためにここで生活している」

「それって良い事じゃないの？」

子供達を見ている青龍の目は悲しかった。

沙羅はその横顔をのぞき込みながら言った。

「それだけ人間界で死んだ子供が多いということだ」

「…っ」

「残念なことに、神界と人間界は共存している」

「共存？」

「ああ。今、人間界は破滅の危機にある」

「地球温暖化、とか？」

すると、青龍はふ…と笑った。

「人間らしい物言いだな」

「じゃあ何よ」

青龍は沙羅と向き合って言った。

「何故、地球温暖化が進んでしまっているか知っているか？」

「え…っそれは、二酸化炭素とか…」

急な質問にしどろもどろになる。

「そんなものではない。確かに科学的にはそうかもしれないが、それを引き起こしたのは神界で墮ちた神擬きだ。それを信じた人間は、過ちを犯し続けた」

「なん…」

見下ろしてくる青龍の瞳は限りなく澄んでいた。

その瞳に映った自分を見ていた。

「じゃあ…神界が駄目になれば、人間界も駄目になってしまうのね？」

「ああ。やってくれなければ、困る」

沙羅は少し目を伏せた後、青龍を直視した。
「分かった。やるわ」

第五話

沙羅が力強く言うつと青龍は満足そうに笑った。

「有難う」

すると、それを見かねたように声がかかる。

「やっと来たんじゃない」

「ああ、玄武」

玄武と呼ばれた人は、少年と言うよりは、青年。年齢は二十歳くらいに見える。

身なりは青龍と殆ど同じで、着物の色は黒だった。

髪は銀髪。肩くらいまでで、そのまま放っておいてある。

「あ…えつと…」

沙羅が戸惑っているつと、玄武が言った。

「おお。紹介が遅れたな」

玄武は屈託なく笑った。

「私は玄武じゃ。そうじゃの…外見はそんなに変わらんが、生きてる年数は千年ぐらい長いんじゃないぞ」

そう言つて、声を上げて笑った。

見た目の割に言葉遣いが古いので、拍子抜けする。

すると、今まで個人で遊んでいた子供達は玄武に寄ってきた。

「げんぶさまーっ」

「きよーはなんのごよう？」

青龍には見向きもしなかった子供達は、皆、着物にみを包んでいた。ある子は蝶柄の。また、ある子は花柄の華やかな着物を着ていた。

「皆元気だったか？」

優しく問いかけると子供は嬉しそうに笑った。

「うん！げんぶさまがまもってくださるから！」

「そうか。よかった。しっかり勉強するんだぞ」

「うん」

その時、一番年上と思われる少年が玄武に寄ってきた。
年は十五くらいに見える。

「玄武様」

「おお、琥珀。久しぶりだな」

「もうすぐ私も出霊しゅつれいです」

「そうか…頑張ったな」

「ありがとうございます」

少年は深々と頭を下げた。

そして、玄武は二人と向き直った。

「そろそろ行くとするかの？」

「行くって…何処にですか？」

「審神様がお待ちじゃ」

そう言つて玄武は歩き出した。

「え…つと…審神様って？」

沙羅は青龍に尋ねた。

「この世の全てを決断される方だ。お前が俺の主として相応ふさわしいか
どうかの審判者だ」

「相応しい…」

沙羅が不安げに俯くと、青龍は沙羅の右手を優しく握った。

「青…龍？」

「大丈夫だ。俺が選んだ人間なんだから」

「うん」

第六話

しばらく花畑の中を歩くと御殿のようなものが現れた。

「すこ…」

大きな門の前には門番と思われる少女が二人、立っていた。

「玄武と青龍じゃ。門戸を開けよ」

すると、右側の少女が沙羅に問うてきた。

「貴方は…青龍の媛ですか？」

「えっと…」

何と答えたら良いのか分からず、口ごもる。

「そつだ」

そと問いに答えたのは青龍だった。

「先ほどいらつしやいました玄武の帝おうと共に神界をお救い下さい」

「あ…つと…」

正直自信のない沙羅は俯く。

「頑張るわ」

沙羅はそれだけ言った。

ギィィ…ときしんだ音を立てて、門は開かれた。

その先には、誰かが立っていた。

「ん…？」

霧のような物でよく見えない。

「よくいらつしやいました。審神がお待ちです」

そう言つて恭しく頭を下げた女性は、とても美しかった。年は二十歳くらいだろうか。

綺麗な黒髪だった。彼女は腰まである髪を流したままなので、動くときさらさらと揺れた。

身なりは青龍や玄武とよく似ていて、朱色の切り袴を纏っていた。

「おお。お前が出迎えとは、なかなかじゃの」

玄武はからからと笑った。

よく笑う人だ、と沙羅は独りごちた。

「そんなことはどうでもいいでしょう」

顔つきは優しいものの、口調は厳しい。

「あら。随分と可愛らしいお嬢様を選んだこと」

青龍の後ろに隠れるようにして立っていた沙羅はおずおずと前に出た。

「初めまして、青龍のお嬢さん。私の名前は朱雀よ」

「朱雀って」

沙羅は慌てふためいたような表情を青龍に向けた。

「ああ。四神の一人だ。お前の守護は…西だったか？」

「あら、ものすごく残念。大はずれ。私の守護は南よ」

少し怒ったような声で言った。

すると、玄武が口を挟んできた。

「おぬし…まさか私の守護も忘れておらんだろうな」

「ああ？お前は北だろ」

「青龍！何で私のだけ忘れてるのよ！！」

そのやりとりを聞いていた沙羅は吹き出した。

「何だ？」

青龍は訝しそうに聞いた。

「だって…神様なのに、中学生と変わらないなって」

すると、三人は少し頬を赤らめた。

その時、背後から罵声が飛んだ。

「遅いぞ！！」

声を上げた張本人は齡30くらい。男性で仁王立ちだった。

「審神様がしびれを切らしている！早くせよ」

沙羅はクイクイと朱雀の袖を引っ張り耳を貸すように促す。

それに従い腰を少し屈めた。

「ん？」

「あの人は？」

沙羅は少しま先立ちになり、朱雀の耳に小さく尋ねる。

「ああ。あれは審神様が一番に気に入っている人。神ではないわ
朱雀はそう言っつて背筋を伸ばした。」

「じゃあ、行きましようか」

第七話

長い廊下を進んで行く。

四人で。

沙羅、青龍、玄武、朱雀。

廊下から見える庭では霞かすみがかつた中に誰か、居る。

「あれ…」

「ああ…」

青龍は前を歩く沙羅に近づき、話した。

「あれは、これから…：そうだな、あと二千年くらいしたら…：人によっちゃあ四千年くらいか。俺達が死んだ後に四神となる奴らだ」

「え…：？」

「四神は神だが、永遠じゃない。残念ながら寿命もあるんだ」

「そう…：なの」

予想外だった。神様は生きて…：それでみんなを守っていてくれると思っていた。

それが…

「どうした？ 黙り込んで」

「ひどい話ね…」

「ん？」

「もう…：自分が神様になった時には次が決まっているなんて…」

すると、青龍は他の二人に聞こえないように言った。

「そうでもない…：俺達が神になった理由ってのはちゃんとあるんだ」

「理由？」

「ああ」

「それって…」

「また…：今度教えてやる」

「意地悪」

沙羅はぶうつと頬を膨らませた。

「何やってる？着いたぞ」

玄武の言葉に、沙羅は身を強張らせた。

一番奥の部屋。

障子の入口の右には龍。左に虎。上に亀。そして、床には鳥が描かれていた。

「きたか」

奥から声だけが響いた。

「入れ」

青龍は何のためらいもなく開けた。

「やっと来たか。随分待ったぞ」

「すまんの。井戸端会議が続いてしまつてのう」

「そんなことはどうでもいい。玄武の帝みかども待ちくたびれているぞ」

「遅せーぞ、沙羅」

中央の一段高い所に座った審神と思われる男性の真下に、純は座っていた。

「純…！」

「いやいや…随分と愛らしい媛だこと…青龍は見る目があるな」

審神はニヤリと笑った。

「それにしても、朱雀、白虎、早く気づいて欲しいものだな」

すると、背後の簾すだれから一人の少年が現れた。

「どうぞでしょう。本人は気づかない方が幸せかもしれませんよ」

その少年の年齢は青龍と同じくらいに見えた。

短い髪はぎりぎりで結つてあつた。

「何が。本当は気づいて欲しいんだろ」

青龍は白虎を馬鹿にした。

すると、白虎はふふっ…と笑つて見せた。

「そうですねえ…何となく気づいてほしいでくけど…現代にも行きたいし」

「この野郎…」

「いい加減になさい」

落ち着いた声が二人に掛かる。

「ほんつと。見苦しいつたら」

朱雀も審神に同意した。

そうして、沙羅に純の隣に座るように促した。

沙羅はゆつくりと座布団に腰を落ち着けた。

それを見計らった後、四神はその正面に腰を下ろした。

「さて… やつと本題に入れるな」

上座にあぐらをかいていた審神は、正座に直した後で言った。

「二人ほど… 媛と帝みかどが足りないが… まあいいか」

その言葉にあと二人、人間がいることを悟った。

「そなた達も聞いているな？我々の役目を」

「えつと… この神界と人間界を守れって話ですか？」

沙羅は先ほど青龍から聞いた話を思い出す。

「ああ。その通りだ。さて、ここからが問題…」

審神は考えるように腕を組んだ。

「その神擬かみもとき等をどう処理するかが問題な訳だ」

「処理…」

「そうだ。… これからそいつ等に狙われる可能性が高くなるな」

「なん…？」

純の表情が曇った。

意味の理解できない沙羅は純に訝しそうな顔を向けた。

「どう考えても、俺達は邪魔だつて事だろ」

「邪魔？」

「神擬かみもときは分かってるつて事だろ？俺達が自分の中の四神に気づいた。と、言うことはその俺達がそいつ等を殺そうとする。だったら、俺達がいなければ四神は霊体でも現代に出てくることできない。

じゃあ俺達、四神の主あるじを殺しちまえて寸法だろ」

「……………」

純の読みは当たるだろうと玄武は低い声でうなった。

「もちろんそんな事にはさせない。だが、朱雀と白虎あひこの主あるじがまだ気

づいていない。二人は夢でも自分の存在を気づかせないからな…」
「え…？」

沙羅は思わず驚いた声を上げた。

「四神つて、必ず夢に出てくるものじゃないの？」

「ああ。自分の主に気づいて欲しい奴だけが夢に現れる。こいつらが何で夢に出て行かないのかは明白だけどな」

青龍はそういつて二人を指さした。

「どうして夢に出ないんですか？」

純は朱雀と白虎に向かって言った。

すると、朱雀の方が早く口を開いた。

「やっぱり巻き込みたくないのよ。大切な人をね…危ない目に合わせたくないの」

「これ以上人が傷つく所を見たくないんですよ…」

続けて白虎が言った。

「いいですか？神界でも傷つくことがあるんですよ。そして、その傷はそのまま現代に帰ったときに残る…分かりますか？神界こうちで死んだらもう二度と人間界あうちには戻れないってことですよ」

「っ」

二人は絶句した。

「これは夢じゃありません。どうします？そこまで危険を犯してでも神界こうちと人間界あうちを守るって言えますか？」

二人は黙って俯いた。

予想外な事を強いられてしまった。

沙羅は考えた。

これからのことを。

人間界を救うと言うことは、世界を救うこと。

無理だ…

正直言つて無理だ。

それでも…

「やります」

四神と審神、純は沙羅の言葉に顔を上げた。

「私、やります。頼りないかもしれないけど…っ…でも…」
沙羅は恥ずかしそうに自分の長い髪を右手で透いた。

「助けてくれるよね…青龍」

彼女は青龍を真っ直ぐ見つめた。

青龍は優しく微笑んで沙羅を見つめ返した。

「ああ」

「さあ、お前はどっじゃ？純。無理にとは言わんぞ」
すると、純は苦笑いした。

「沙羅がやるって言ってるのに俺だけ逃げられんねーよ…」
そして、自分の髪をくしゃっと掻き上げた。

「有り難う…純」

「おう」

第八話

「で。とりあえず私は何をしたらいい？」

人のいない中庭で沙羅と青龍は話していた。

そこには小さな池があり、花が浮かべてある。それを綺麗だと呟く。

「ああ。忘れてた」

青龍はそう言って懐ふしから何かを取り出した。

青龍の手のひらにあったもの、それは。

「宝石？」

「ああ。俺の色だと言われている薄氷色アイスブルーだ。ここに来る前にもらった桔梗印の首飾りにはめ込んでおけ」

「う、うん……」

沙羅は制服のポケットからペンダントを取り出した。

「あ。ほんとだー…真ん中に入れられる…」

青龍は沙羅の行動を、目を細くして見ていた。その視線に気づいたのか沙羅が声をかけてきた。

「何？」

「いや……」

「それで…どうやったら青龍を現代に呼び出すことができるの？」

「あー……」

青龍はめんどくさそうに頭をかいた。

「呪文があるんだが…長いぞ」

「げっ」

「詠唱破棄できるんだが…慣れないと無理だ」

「分かったわ。言って」

しようがないかあ、と言って、青龍は言い始めた。

「復唱しろ」

「うん」

『東あづまの地に馳あそせし龍神よ、蒼あおの色を持つ神よ、四神よかみの主ぬしである我に

神を使わせよ。出陣・青龍!！」

最後の言霊を唱えた途端、足が中に浮いた。

「　　んな　　っ」

落ちてゆくような感覚に捕らわれた。

「っわ!！」

視界が回復した時には、もう地面がすぐそこだった。

「っっ…」

落ちる、と言う恐怖で目をきつく閉じる。

しかし、暫くしても落ちた衝撃は感じない。

恐る恐る目を開くと青龍に抱かれていた。

「なん…っ!?!」

「大丈夫か?」

「っ…まあなんとか…」

青龍はそつと沙羅を地面に下ろした。

「お帰りなさいませ、沙羅さん」

声の方に顔を向ければ、愛美が立っていた。

「それと…」

愛美は青龍の方を見ていった。

「初めまして、青龍様。巫女の愛美と申します」

そう言つて深々と頭を下げた。

「お前か…沙羅たちを神界（こうち）に送つたのは」

「その通りです」

「ち…っちよつと青龍!！」

沙羅は青龍の袖を引つ張つた。

「何だ?」

「あなた、他の人間にも見えるの!?!」

「いや。見えないはずだ。お前や純のような霊力の強い奴にしか見

えない」

「そう…なの…?」

あまりに青龍がさりとらうので返って可笑しかった。

その時

「つきや…!!」

いきなり砂埃が辺りに舞った。

何事かと思い、目を凝らすと二人の少年が見えた。

「済まん済まん。着地に失敗してもうて」

古い言葉遣いにその正体はすぐ分かった。

「つてえ…」

「大丈夫か?純」

「大丈夫なわけねえだろ!?むちゃくちな着陸しやがって!!」

「やかましいがな。どうでもいいだろうが」

「よくねえツ!!」

すると、沙羅が口を挟んだ。

「あの…聞きたい事があるんだけど…」

未だ揉め合っていた二人にも話題を振った。

「呪文を唱えれば、四神つて誰でも呼び出せるの?」

沙羅の問に答えたのは青龍だった。

「誰でも…と言うわけではない。四神用の首飾りを所持していて、

尚かつ全ての呪文を唱えなければならぬ。詠唱破棄は通用しない」

「そうなんだ…でも、知ってた方が便利じゃない?」

「第一、自分の主以外の奴に呪文は教えない。常識だ」

あっさりと青龍に否定された。

「分かったわ…」

すると、隣で愛美が青龍に尋ねた。

第九話

「一つお聞きしたいことがあるのですが」
「何だ」

愛美の言葉を何とも思わないような表情で青龍は答えた。

校舎の屋上に気持ちの良い風が通りぬけた。その風に沙羅は身を任せた。

「神には四神の他に十二神将がいると我が神社に伝わっています」

「ああ。居る。基本的に人間を主としないがな」

「へえ……」

質問をしたのは愛美の筈なのに、沙羅のほうが感心してしまった。

「とりあえず、朱雀の媛と、白虎の帝を探し出さないとな」

青龍はため息混じりに言った。

その時、終業のチャイムが鳴った。

「やっべ！先公に怒られる……！」

純が慌てたように言った。沙羅も例外ではない。沙羅は青龍と向き合った。

「ごめん青龍！神界に帰す呪^{シユ}つてあるの？」

「無いわけではないが、教ない。それを唱えてしまえば、二度と私を呼び出す事

は出来なくなるからだ。いわゆる、強制送還だ」

「分かった……じゃあ、帰って」

沙羅は青龍をしっかりと見据えて言った。

「何？」

「霊力の強い人に見えたら大変でしょ？」

「そんな奴はそうそういない。多少なり霊力があっても、見えない場合がほとんどだ」

青龍は随分まともな事を言った。すると、玄武も青龍に同意した。

「つまりな、私達が見えるということは、四神の主の可能性が高いということじ

や」

「だーっ！何でもいい！一緒に来い、玄武」

純が喚いた。沙羅も青龍に言った。

「行こう、青龍」

その言葉を合図にら愛美が階段のドアを開けた。

『やっぱり帰らない？』

沙羅は国語の授業中、小声で隣に立っている青龍に言った。

だが、青龍は軽く首を横に振っただけだった。

沙羅は小さくため息をつき、三列右を見た。そこに座っている純の隣にも玄武が

立っていて、護っているように見えた。

ノートを取ろうとして何かの視線に気付いて顔を上げた。

『どっした？』

青龍が語りかけて来たが、応えられない。鼓動が速くなる。

6月でまだ涼しい筈なのに、嫌な汗が背中を伝った。

言葉を失い、純に目をやると、彼も何かを感じているようだった。

「せ……」

青龍、と呼ぼうとしたが声が出ない。喉が締め付けられるような感覚。

否、首を締められるような感覚。

苦しい……

『どっした？』

再度の問い掛けに沙羅は、金縛りが解けたように楽になった。

「……っか……はっ……」

上手く呼吸が出来なかった。すると、青龍は霊体の手で優しく沙羅

の頭を撫でた

『青龍…』

『どうした？何か感じたのか？』

沙羅は小さく頷いた。そして、純を見た。

『純もか？』

青龍は玄武に問い掛けた。聞こえざる声で。

『ああ。その様子だと、沙羅も何かあったようじゃな』

純は流れ出した汗を拭った。沙羅も、ハンカチで首の下を押さえた。

そのハンカチを見下ろして驚いた。

血だ。

咄嗟に沙羅は自分の首の回りを触ってみたが、傷らしきものはない。

異常だ。

『青龍…どうしよう…』

沙羅は動揺した目で、青龍を見上げた。すると彼は、首を横に振っ

た。

『落ち着け。大丈夫だ』

静かな口調で言った。

沙羅はゆっくりと頷いた。

第十話

「終わっ…たあー」

純が大きく伸びた後、隣にいた玄武が純に言った。声ならぬ声で。

『純、沙羅殿を呼んで屋上に行くぞ』

「分かった」

純はいつになく真面目な表情で頷いた。

「沙羅、青龍。屋上行くつてよ」

沙羅は椅子から立ち上がり友達にトイレに行くと断って、教室を出た。

「あれ…何だっただんだろう…」

屋上への階段を上る際、擦れ違った少女がいた。

「え……？」

その娘はすれ違い様に声を上げた。

「先輩……？」

「んあ？」

純は振り返った。

「お。和美かすみじゃねえか」

「和美？」

沙羅は聞き返した。

「ああ。俺、剣道部だろ？その後輩」

彼女の背丈は沙羅より少し小さかった。多分、愛美と同じ位だろう。

そして、髪は短い。

しかし、和美には二人のやり取りさえ聞こえないようだった。

「どうした？」

純が和美に尋ねると、彼女は常人には見えない者を指差した。

「あの…この人達は…？」

「…！？」

二人は驚いた。

「お前さん…私達が見えとるんかい？」

玄武は階段を一段下り、尋ねた。

「見え…？何…」

明らかに和美は動揺していた。

「どういうこと！？普通の人には見えないんじゃないの？」

沙羅は青龍に向かって聞いた。

「この娘が普通じゃないって事だろう」

青龍は腕組をして言った。

「あの…先輩…」

「お前って幽霊とか見たことあるか？」

「はい？」

「どういう事よ！？」

沙羅は思わず青龍の胸元を掴んだ。

「おい…」

「何で今まで見えてなかった人がいきなり見えるようになるのよ！？」

「とりあえず、手離せ」

青龍の言葉に、沙羅は勢いよく手を離れた。

「っわ！ごめ…っ」

「まあ、その娘連れて愛美サンのお話聞きゃあいいがな」

「愛美っ！？」

連れて来ていないはずの愛美がいつの間にか背後に立っていた。

「俺、頭ん中限界…」

純は頭を押さえて言った。

「行きましようか、屋上に」

愛美が言っていると、和美は尋ねた。

「まつ、まな…私は？」

「勿論、一緒よ」

「で？」

沙羅は自分の疑問を口にした。

「どういう事。この和美ちゃんとか言う子、何で青龍達が見えるの？」

「簡単な話事です。沙羅さん、貴女も今日まで霊なんて見た事なかったでしょう」

「？」

「でも、この子は何も知らないのよね……」

沙羅は戸惑いの眼差しを青龍に向けた。

「和美」

彼は少女に向かって、決定的な言葉を口にした。

それと同時に愛美に目配せしてた。

すると、五芒星のペンダントを和美に渡した。

それを受け取った和美は不安そうな顔をした。

「俺がこれから言う事を復唱しろ」

「……え？」

「分かったな？」

青龍は厳しい目で彼女を睨んだ。

「はい……」

青龍は呼び出しの言霊を唱えた。

『朱の鮮血と謳われし彼の女神よ、我に焔の力を遣わせよ。守陣・

朱雀！！』

和美が復唱し終わった途端、熱風が吹いた。

そう思ったら紅に白が混ざった光りと共に、火神・朱雀が現れた。

「あ……わ……」

和美は言葉を完全に失っていた。

「よくも、余計な事をしてくれたわね……青龍」

朱雀は青龍を恨めしげに見た。

「仕方がないだろう。四神が揃わなければならないのだから」
青龍はうんざりしたように言った。

しかし、和美は動けずにいた。

「あ…った…」

そんな彼女に、朱雀は優しく微笑んだ。

「こんにちは、和美様。私に見覚えはないかしら？」

「え？」

和美は目を丸くして考え出した。

しばらくして、和美は大きな声を出した。

「ああっ！！あなた、私が事故に会った時…に…
すっかり思い出した和美は朱雀に頭を下げた。

「あっ、あの時はありがとうございましたっ！！」

「和美様…ご無事でなによりです」

その様子を見た沙羅は青龍の袖を引っ張った。

「ん？」

「どーゆーこと!?!？」

「お前…少しは勉強しろ」

青龍は呆れ顔で言った。

「ちよっ…!! あんたねえ！私だって今日四神…とか言う存在を知
ったのよ!?!? それ

なのに、勉強しろはないでしょ!?!？」

沙羅は青龍に激怒した。彼はただ目を丸くして聞いていた。

「なん…」

「それなの…に…」

青龍の袖を引っ張っていた手の力が抜けた。

その刹那、沙羅の全身から力が抜け、前に倒れた。

「おい…!?!？」

青龍は咄嗟に沙羅の体を受け止めた。

「ごめ…何か体が怠い…」

「今日は疲れたんじゃけえ… ゆっくり休むが一番じゃ」
玄武は沙羅に優しく言った。

「ん…」

沙羅は青龍に体を預けたまま、寝息をたてはじめた。

「寝てやがる」

「しょうがねえだろ」

純は青龍に言った。

「こいつはもともとストレスに弱いんだ。大きなショックとかアクシデントとか

。すぐに体力を使っちゃう」

純はすうすうと寝息を立てる沙羅を見て言った。

第十話（後書き）

十二神将の戯れ、読んで下さった方居ますでしょうか？
神人な恋人と関連してますので、良かったらそちらも…

第十一話

「う…ん…」

沙羅は何かふわふわしたもののの中で目が覚めた。

「よお。目、覚めたみてえだな」

「純…」

沙羅は保健室のベッドで横になっていた。

「私…？」

ベッドから体を起こし、純に尋ねた。

すると、一人の少女がカーテンから顔を覗かせた。

「あ、先輩。起きたんですね」

「あーっと…」

「和美です」

彼女はにっこり笑って言った。

「あれ…？青龍達は？」

「いったん神界に帰った。人間界こうちにいるとすごい靈力を消費すんだ

とよ

「

純は和美に水を持ってくる用に頼んだ。

「何か…今日はいろいろと大変だったね…」

「まだ今日は終わってねえよ」

純はため息をついた。

「先輩、お水…」

「ありがとう」

和美が持って来たグラスを受け取った。そして、水を口に流し込んだ。

「ふう…」

一息をつき、天井を仰いだ。

「あっ、気がつきました？」

保健室の先生が顔を覗かせた。

「はい。お騒がせしました」

沙羅は座ったまま頭を下げた。

「いえいえ。それじゃあ、二人は6時間目に行きなさい。沙羅ちゃんは何？」

「私も行きます」

沙羅は上履きを履きながら言った。

「沙羅、大丈夫!？」

教室に入るなり、美佐が駆け付けて来た。

「うん。ありがとう」

「心配したんだから。屋上で倒れたって聞いて」

「ごめんごめん」

すると、ポンと後から軽く頭を叩かれた。

「いい友達を持ったな」

純はそう言った。

「え…」

「なーに？沙羅と純君でそういう関係??」

「違うよ」

その日、沙羅は弓道部には出なかった。

純、和美と共に愛美に呼び出されたからだった。

「ちよつと此処…」

和美は思わずそれを見上げた。

沙羅と純も例外でない。

「私の家です。今日から此処で修業しましょう」

そこは赤い鳥居に長い階段があった。

「ま…真面目に神社だったんだ…」

四人は階段を登り始めた。

すると、一人の女性が箒で境内を掃いていた。歳は五十位だろうか。

「あら、まなちゃん。お帰りなさい」

「ただいま、おばあちゃん。裏の弓道場を借りてもいい？」

「どうぞ」

その女性はとても優しく微笑んだ。

しかし、その女性の瞳は確実に沙羅を捕らえていた。

「弓道場なんてあるの!？」

沙羅は愛美に尋ねた。

「はい。昔、叔母様が使っていました」

「叔母…」

沙羅はそう呟いてから、愛美に言った。

「ね、少し借りてもいい?弓道場。今日部活出るつもりだったから持ってきてる

んだ」

「いいですけど…制服でやるんですか？」

「問題無いって!」

愛美は更に境内の奥に進み、家の裏に回った。

「すげえ…マジで弓道場がありやがる…」

「よしっ!大会近いんだから練習させてよね!」

沙羅は背負っていた長い物を下ろした。

そして、中から弓を取り出した。

「あーっと…愛美ちゃん、矢つてある??」

「あります。ちよつと待つてて下さい」

愛美はそう言つて表へと回つていった。

「修業つて何やるんだらう」

沙羅は弓の調子確かめながら言った。

「さあな。でも、今日俺達が会ったあの恐怖から身を守るものだろうか？」

「んー…多分ね…」

すると、愛美が矢筒を持って来た。

「ありがとう。いくつ入ってるかな…」と

「六本しかなかったのですが、よろしいですか？」

「全然大丈夫」

沙羅は笑って言った。

一本だけ矢を抜き、立ち上がった。

「先に修業しててもいいからね」

沙羅がそう言うと、和美が言った。

「私、見ていてもいいですか？」

「もちろん！」

沙羅は的の正面に立った。

「じゃあよく見ててね」

見ているのは和美だけではない。そこにいた全員が注目した。

「よし…」

沙羅は気合いを入れ、弦に矢を掛けた。

一息をつき、顔の横で一気に引いた。

キラ…ッ…

一瞬の沈黙。

タァン…ッ

矢は僅かばかり中心からずれたものの、大分中心に近かった。

「すっごーい!!」

和美は手を叩いた。

「うーん…もうちょいだったのに…」

沙羅はもう一本矢を取った。

「先輩…」

愛美はしびれを切らせたように言ってきた。

「もう一本だけ…次は命中させるから」

沙羅がそう言ってからほんの数秒もかからなかった。

タンツ…

「…え？」

これには流石の愛美も驚いた。

今度は確実に中心に当たっていた。

「すげえ…」

純も目を丸くして言った。

「んじゃ、愛美ちゃんの言う修業ってやつをやるっか」

第十一話（後書き）

PVアクセスが10000人突破しました！
ありがとうございます！！

第十二話

「皆さんにはまず、結界を張れるようになっていただきます」

「結界？」

三人は同時に聞き返した。

「自分自身を守っていただかなければなりません」

「どうしたらいいの？」

沙羅は真っ先に聞いた。

「私は結界を張ることはできません。でも、言霊と振りだけは分かります。真似

してください」

「わかったわ」

愛美は二本組んだ指を前に出した。

沙羅もそれに従う。

『刹那！十九の時が強欲な支配を求めている！二十の生・二一の死！三五の珠つぼみ』

・結界！！』

二人の声が重なった瞬間、沙羅の側にいた和美の様子が変わった。

「……っ」

「どうした、和美」

「あ……いえ……」

一瞬、身体が飛ばされそうになったが、すぐに治まった。

「……で？これって結界張れるの……？」

沙羅は組んだ指を前に出した格好のまま言った。

「多分張れていませんね。一瞬だけ張れていましたけれど……」

愛美は言った。

「いいですか。大切なのは、自分の靈力をコントロールできること。

思った通り

の扱いが出来なければ、回りの人に危害が及ぶ事もあります」

「んな事言ったって…扱い方も知んねえよ」

純は自分の頭をくしゃつとかきあげた。

「いいえ。今もコントロールしていますよ。まあ、強制的にですけど」

「え…？」

「そのペンダント。今の貴方達の靈力は本当の五分の一。相当押さえられています」

「五分の一…」

その言葉に沙羅は大きな不安を抱いた。

『じゃあ、残りの五分の四は…？』

すると、純が自分の首からペンダントを力任せに引き契った。

鎖がシャラリとなつて、切れた片方が地面に落ちた。

「じゃあ、こんなもん無え方がいいじゃねえか」

「何してるんですか!？」

愛美は純に向かって怒鳴った。

「俺あ回りくどい事は嫌いなんだ」

右手に持っていた鎖の残りも地面に落とすとした。

そうして、一歩下がった。

「全員俺に近づくんじゃねえぞ」

純は勢いよく印を結び、言霊を唱えた。

「刹那！十九の時が強欲な支配を求めている！二十の生・二一の死

！三五の珠・結界

っ！！」

ドオ…ッ…

純が結んだ指先から突風が走った。

「…っわ!？」

弓道場に激しい砂埃が舞った。

「じ…じゆ…」
自らの目を庇いながら、彼な方を見た沙羅は驚いた。
「!?!」

誰

そこに立っていたのは着物を纏った男だった。
「な…っ…どういう事…?」
そこにいた全員が息を飲んだ。
「…っ!」

沙羅は自分のペンダントを掴んで、叫んだ。

「東の地に馳せし龍神よ、蒼の色を持つ神よ、四神の主である我に神を使わせよ! 出陣・青龍!」

すると、空から白く鋭い光りが挿した。かと思えば少し遅れて蒼い光りが舞い降りた。

「青龍つ!」

沙羅が光に駆け寄ると、後からもう一人現れた。

「玄武!」

驚きの連続だった。

「和美、お前も早く呼べ」

青龍は和美に向かっていった。

彼女は頷くと、言霊を唱えた。

「朱の鮮血と謳われし彼の女神よ、我に焔の力を遣わせよ! 守陣・朱雀!」

再び紅い閃光が走り、朱雀が現れた。

「馬鹿ね、あの子」

朱雀はため息をつきながら言った。

「私の責任になってしまいがな…純の阿呆ンだらが」
「つべこべ言わず片付けるぞ」

青龍は型の高さまで右手を上げた。

「待つて青龍！！」

沙羅の声に青龍は動きを止めた。

「純はどうなっちゃったの！？私達は…」

「お前は黙って見てろ。大丈夫だ。あいつはなんとかする」

青龍は掲げた右手を勢いよく下に振り下ろした。

その直後、彼の右手には神器が握られていた。

それは、宝具・龍矛^{りゅうぼう}

「朱雀。そっちはまかせるからの…」

玄武は額の前辺りに右手を上げ、呟いた。

「来い・雷光^{らいこう}」

玄武の手には一本の刀が握られていた。

名を、雷光。

「先輩は…どうしたんですか…？」

和美は自分達の前に立ちはだかる朱雀に問うた。

「一気に靈力が開放されて、収集がつかなくなったのです。つまり、

今の彼は靈

体、幽霊です」

「肉体に…靈力が納まりきらなくなってしまったんですね」

「はい」

沙羅は彼等を見た。

「こりゃあ…ひどいな」

玄武は呟いた。

「近づくこともできないな…」

青龍は矛を掲げた。

すると、その手を玄武が止めた。

「止せ。力づくでやったら純が死んでまう」

「無理だ。今のこいつに言葉は通じない」

青龍は冷たく言った。

「貴様：純が死んでもいいと言うんか!？」

玄武は顔を歪めて怒鳴った。

「何してるの!?二人とも早くして!!!」

後から朱雀が叫んだ。

「朱雀もああ言ってる。このままではみんな死んでしまうぞ」

青龍は右手に力を入れ、玄武の腕ごと振り下ろそうとした。

「待って!!!」

背後から聞こえた声は沙羅のもの。

彼女は弓を引いて立っていた。切っ先は純。

「どいて。当たるかもしれないわよ」

「何するつもりじゃ!?青龍のひめ……」

玄武が言い終える前に矢は放たれた。

沙羅の矢は純の結界を突き抜けて、彼の真横を掠った。

一気に集中が解けたせいか、純は悲痛な叫びを上げ、倒れた。

「純!!!」

玄武は純に駆け寄った。

彼はもう着物ではなく、制服に戻っていた。

「お前：何をした？」

青龍は沙羅に歩み寄り、尋ねた。

「うん?弓矢で撃っただけだよ」

「違う。純の霊力をどうやって静めたかを聞いているんだ」

すると、沙羅はああと言って下に落ちていた鎖を取り上げた。

「これ、純のペンダントの一部なんだけど…これを矢の先っちょにくくり付けた

の。自分の結界も少し結んでね」

そう言って、ニッコリと笑った。

第十三話

「この大馬鹿者!!!」

愛美の部屋に、玄武の怒鳴り声が反射した。

沙羅は呆れて窓の外に目をやる。

ベッドの上に座っている愛美もため息をついていた。

朱雀と青龍は部屋の外にいた。

「沙羅：あいつはとんでもない奴のようだ」

青龍は朱雀に言った。

すると朱雀はくすくすと笑った。

「いいじゃない」

「朱雀、お前はいつもそうやって笑うんだな…」

「あの…」

廊下の向こう側からかけられた声は、愛美の祖母だった。

「お前：私達が見えているのか」

「あまり驚かないのですね…」

彼女は俯いてしまった。

「ああ。愛美の祖母だからな。見えてもおおかしくはない」

「あの娘：愛美は不思議な子です」

「何？」

「まるであの娘は私の娘の…」

愛美の祖母が何かを言おうとした時、ある男性に呼び止められた。

「母さん！何やってるんだよ」

「ごめんなさい：今の事は忘れてね、神様」

彼女はその男性と共に去っていった。

「何なんだ？」

青龍は訝しいそうに言った。

「温厚そうな人ね」

朱雀は笑って言った。

彼女は笑っているところしか見たことがない。

「青龍！っ、帰ろう」

沙羅が愛美の部屋から出てきた。

「帰る？どこにだ？」

「どこって…家に」

不思議そうに言った。

そして、青龍の左手を引つ張った。

「なん…っ」

「早く帰ろっ！お腹空いちやった」

青龍は目を細めて沙羅に従った。

「あら、ずいぶん遅かったわね」

家に帰ると、沙羅の母が夕食を作って待っていた。

「うん。友達の家に行ってたから」

沙羅は玄関で靴を脱ぎながら笑顔で答えた。

「とりあえず、着替えてきなさい。お父さんも仁美ひとみも待ってるわよ」

沙羅は分かっている、と言って部屋に入った。

「さてっ…と…青龍、神界に帰れる？」

「勝手に呼んでおいて…」

「ごめんてば。あの時は頭がパニックだったし…」

沙羅は制服を脱ごうとして、気付いた。

「これじゃあ、着替えもできない」

青龍はため息をつき、結ってあった髪を解いた。

「…え」

「また何かあったら呼べ」

彼はそれだけ言って、霧のように消えた。

「……何で髪下ろしたんだろっ？」

沙羅はブラウスのボタンに手をかけたまま固まっていた。すると、下から母の声がした。

「沙羅ー。早くしなさい。みんな待ってるわよ」

「はいー！」

タンスの中から適当にTシャツとスカートを取り出し、無造作に着た。

「ごめん！お待たせ」

沙羅は謝りながら自席に着いた。

四人は箸を動かし始めた。

「お姉ちゃん、何で今日こんなに遅かったの？」

妹の仁美が口をもごもごさせながら聞いてきた。

沙羅が時計を見ると、八時をまわっていた。

「んー…友達ん家に行ってきたから」

「友達？」

今度は父親が聞き返した。

「うん。後輩なんだけどね。みんなで……遊んでた……」

さすがに修行をしていたとは言えず、ごまかした。

「ふーん……じゃあ、部活には行ってないんだ」

「うん。練習はしたけど……」

きょうのおかずは肉じゃがだった。

一人ずつ、花柄のお椀によそってあった。

「お姉ちゃん、食べないならちようだい」

仁美は姉の返事を聞く前に、お椀に箸を伸ばした。

「あーこら、私が肉じゃが好きなもの知ってるくせにー！」

「もーらいつー！」

中学三年生の姉に対し、小学四年生の妹はませて見えた。

「こらこら。やめなさい仁美」

父親に制され、仁美は沙羅のお椀からつまむのをやめた。

「はいー！だってお母さんの肉じゃが美味しいんだもん」

仁美は笑っていった。

「ありがとう。お世辞はいいから、早く食べなさい」

沙羅の家庭はいつもこんな感じだ。

そして、近所では仲がいいと評判だった。

「ごちそうさま」

沙羅が自分の食器を片付けていると、母親が呼び止めた。

「デザートあるわよ。いつ食べる？」

「んー…今日はいいや。仁美にあげて」

沙羅はそう言っつて、階段をのぼった。

「疲れた…」

部屋で一人になると、どつと疲れが出るようだった。

そして、自分の首からペンダントを取った。

部屋に電気は点けていない。

五芒星の中心に嵌めた宝石が月明かりに光った。

「わぁ… 案外、綺麗ね… 青龍の石… 素敵な蒼…」

沙羅はベッドに倒れた。

すると、胸がいきなり高鳴った。

ドクン…

「な…に…」

鼓動が速まる。

でも、嫌な感じではない。

ドクン…

ドクン…

次第に納まっつていく胸に手を当てて思った。

『世界を救う… 私なんかにできるのかしら…』

きつと大丈夫だと思った。

青龍がいるから。

みんながいるから。

沙羅はそのまま眠っつてしまった。

第十三話（後書き）

まだ神様に恋しませんね…
タイミングが掴めない…

第十四話

「っわ！！遅刻する！！」

沙羅は慌ててベッドから跳び起きた。

「もうっ！何で起こしてくれなかったの！？」

すると、仁美は笑いながら言った。

「だって、疲れてたみたいだから」

「遅刻したら元も子もないでしょ！？」

「大丈夫。まだ遅刻しないって」

「沙羅、ギリギリセーフ！！」

クラスについた沙羅を美佐が出迎えた。

「本当に…ギリギリ…」

その時、首に掛けてあったペンダントが震えた。

「なっ！？」

「どうしたの、沙羅」

美佐は不思議そうに沙羅を見た。

「ち、ちよつと保健室…」

沙羅は屋上に全力疾走した。

「何なのよ、一体…」

すると、再び屋上のドアが開いた。

「純…？」

「お前もか、沙羅」

純は苦笑いした。

妙に嫌な予感がする。

刹那……

ヒュンツ……

「きゃっ!?!」

何かが飛んできた。

「な……」

だが、それは見当たらない。

「一体……」

「沙羅っ!! 早く結界張りやがれ!!」

「……っ!! 刹那! 十九の時が強欲な支配を求めている!! 二十の生・

二一の死! 三五の

珠・結界っ!!」

結んだ指先から発せられる突風。

しかし……

「馬鹿野郎っ!! 張れてねえぞ!!? お前……」

純はそう叫ぶ前に、自ら結界を張った。

「っ……!!」

沙羅の前に立って珠を唱えている純は、昨日の事件で長い間結界を

張れるように

なっていた。

「純……」

「何してる!?! 早く呼べ!!」

「東の地に馳せし龍神よ、蒼の色を持つ神よ、四神の主である我に

神を使わせよ! 出陣・青龍!」

その瞬間、相手の攻撃が止んだ。

「な……」

沙羅も純も立ち尽くしてしまった。

屋上に再び静寂が戻る。

「何だったの……? 今のやつ……」

「神擬きだ」

「青龍っ!!」

彼は右手には龍矛りゅうぼうが握にぎられていた。

「あいつらが出てきたということは、何か騒さわぎを起おこそうとしてい
るな」

「騒さわぎ？」

沙羅は聞き返した。

「あやつらが逃げた先は東京じゃ」

「玄武……」

いつの間にか呼んだのか、玄武が立っていた。

「審神から指令よ」

屋上の階段から聞こえた声は朱雀のもの。

「先輩、大丈夫でしたか……？」

前には和美がいた。

「ん……平気」

「今日、東京で大きな事件が起きるわ。死人が出るかも……っあ!？」

審神からの指令を読み上げていた朱雀が声を上げた。

「どうした？」

「白虎の主……が……危ないかもしれない……」

朱雀はゆっくりと語り始めた。

「四神の中で神の存在に気付いていないのはその人だけ……邪魔なの
よ。四神の主
が……」

その場にいた全員が息をのんだ。

嫌な汗が背中を伝う。

「行くぞ」

青龍は沙羅の腕を掴んだ。

「ち、ちよっ……私学校っ!!」

「仕方がない……十二神将を呼ぶ。身代わりをさせよう」

青龍は当たり前前の事のように言った。

しかし、玄武と朱雀の表情が一変した。

「何を言っているんじゃない!!それは禁忌だとわかっているだろうに

「!!」

「青龍、どうしたの!? 十二神将なんて…そんなの駄目よ!」
二人は慌てていた。

沙羅達はなぜそこまで怒っているのか分からなかった。

「かまわん。罰なら私が受けよう」

青龍は右手を高く上げた。

しかし、その右手は朱雀の言霊によって下ろされた。

「駄目：私が許さない」

「私もゆるさん。私情で動かれては困るんじゃよ」

玄武も青龍に近づいていった。

「貴様ら…」

「待って!!」

その争いを止めたのは沙羅だった。

「青龍、分かったわ：我が儘言つてごめんなさい…」

すると、純は沙羅の肩を叩いて笑った。

「俺だって、和美だって同じだ。怒られる時は一緒だぜ」

「分かったわよ」

沙羅は朗らかに笑った。

数分後、六人は東京にいた。

空は狭く、息苦しい。

行き交う人々は生気を無くしたかのように忙しく歩いていた。

見渡す限り、緑は一本も見当たらなかった。

沙羅達の住んでいる所とは大違いだった。

あの場所は、そこに居るだけで安らいだ。

だが、ここは違った。

鳥の鳴き声など以つての外^{ほか}。

車のエンジン音しか聞こえない。

「東京…って…こんな所だったっけ…？」

あまりの光景に沙羅は啞然とした。

以前、部活の大会で来た東京はこんな光景だっただろうか。

「俺も…何か気持ち悪い…」

排気ガスと二酸化炭素で頭がくらくらした。

倒れそうになる体を必死に両足で支える。

すると、純が倒れるより先に誰かがよるめいた。

「青龍っ！？」

沙羅が駆け付けると青龍は地面に腰を下ろした。

そんな中、東京な人々は見向きもしなかった。

まるで何かに取り付かれたように…

自分の意思を持たぬかのように…

「大丈夫？」

そつと、青龍の長い前髪を撫でた。

「ああ…気分が悪いだけだ」

そつは言っているものの、明らかにおかしかった。

「ねえ、青龍はどうしたの！？何で…」

沙羅が玄武に尋ねると、朱雀がそれに答えた。

「青龍は五行の中で木を司っているわ。しかも彼は四神の力…つまり、人を主に

できるという意味だけれど、その他にも十二神将という神の力も携えているの

よ。だから余計にこのような場所で影響を受けてしまうのよ」

「どうしたらいいの!？」

沙羅は青龍の髪に触れたままの姿勢で言った。

「とりあえず清浄^{せいじょう}結界^{けつがい}を張りましょう」

第十五話

沙羅は青龍の正面に立った。

両手は平を青龍に向けて。

「いいですか？復唱してくださいね…？」

沙羅は小さく頷いた。

『紅の華・白の華。空の果てと無限の地。三の珠・浄結』

沙羅の手から暖かい光が溢れた。

かと思えば、青龍の呼吸が徐々に緩やかになっていった。

「ずげえな」

純は開心したように言った。

「大丈夫？少しは楽になった？」

沙羅が青龍の顔を覗き込むと、顔を片手で隠してしまった。

「大丈夫だ…心配いらない…」

その言葉に安心して、体を持ち上げた。

「沙羅さんはどちらかというと、攻撃的な珠は向いてないわね。人

を癒す珠の方

が素敵だし、難しいのよ」

朱雀は笑って言った。

すると、人のざわめき方が変わった。

「何か…あつたのか!？」

「手遅れにならない内に、早く行くわよ!！」

六人は騒ぎのあるほうに走って行った。

たどり着いたそこは……

「今日、高校の弓道大会なんだ…」

沙羅はそう呟くと、中に走って行ってしまった。

「…っ待てよ、沙羅!！」

残りの五人も続いて入った。

「沙羅っ!!待て…」

袴姿の学生が走って出口から逃げようとする中、逆流するのは一苦
勞だった。

「沙…羅……」

ようやく立ち止まった彼女に、純は声をかけた。
しかし、返事はなかった。

しばらくして、観客用の柵に身を乗り出すようにして、競技場を見
た。

「どうした？」

青龍が沙羅の隣に並ぶと、震える指で中央を指差した。

そこには、五人ほどの学生に暴行されている少年がいた。

「おい…沙羅、あれって…どこ…」

どこかで見た事がある。

純はそう言おうとした。しかし、それより早く沙羅が叫んだ。

「沢っ！！」

言うなり柵を飛び越え、その少年の元に向かっていた。

「何をする！？」

青龍は沙羅に向かって叫んだが、聞く耳を持たない。

「クソ…」

純や青龍達も沙羅に続く。

沙羅はとにかく信じたくなかった…

どうしてあの人が…

まさか…

その時、沙羅から発せられた言葉…

『四の泉に湧き出し水の精よ！！青龍の主である我に使えよ！！季・
立夏！立冬！！』

無意識の内に、両手を前に出していた。忌まわしき者達に向かって…
清浄結界の時と同じように。

その手の先から青と黄・二つの光が放たれた。

『立夏・風化集結っ！！』

その声と共に、青の光が輩に飛び掛かった。
「…っわ!?!?」

いきなり、限りない突風が吹く。

続けて言霊を言い放つ。

『立冬・薄氷流水!』
はくひょうりゅうすい

その言葉と共に黄の光がほとばしる。

『退け』

沙羅は自分の声とは思えなかった。

第一、こんな言霊は誰にも教わっていない。

しかし、彼を守りたい。

守りたかった。

「ぐ……っ……」

次第に輩の顔が青ざめていく。

「止せ」

青龍の言葉に沙羅は意識が戻ったような感覚に捕われた。

「っ……!青…龍…」

「それ以上やると、死んでしまうぞ」

「ごめ…なさ……」

自分が恐ろしかった。

このままでは…

「あいつらを戻せ」

「分からない…どうしたら…」

「大丈夫だ。おまえには分かっている。あいつらの扱い方を…」

沙羅は目を閉じた。

『私には、分かる…』

「戻れ」

それだけだった。

それで十分だった。

二つの光は沙羅の元に帰って来た。

すると、二つの光は人型に変わっていった。

否、人型というのは正しくないかもしれない。
小さい。

背丈は十五センチ位。

青の光は少年に。

黄の光は少女に変わった。

「ええええ！？」

『気付いてくれてありがとう』

小さな少年の方が話して来た。

「あ…えと…」

沙羅が戸惑っていると、青龍が語りかけてきた。

「そつちも大事だが、まずはあつちだ」

そう言っ指差した先は…

「沢…」

第十六話

「さて…何から話せば良いかな…」

青龍・朱雀・玄武を見て驚いている沢は、沙羅に支えられてやっと立っている状態だった。

別に腰が抜けているわけではない。怪我だ。

純と和美は沙羅によって死にかけた五人の学生の状態を確認していた。

今、この武道館には沙羅達しかいない。

「玄武、やっぱりお前の言う通り神擬きに操られていた痕跡が残ってた」

純の報告に満足したように笑った。

「随分と霊力を使うのが上手くなったな」

「あつたりめーだろ？ほら、俺天才だし？」

「阿保」

二人がふざけているのを無視して、朱雀が沙羅に言った。

「だ、そうです。回復の珠を教えるから治してちょうだい」

「はい…」

すると、和美は朱雀の袖を引っ張って言った。

「私には…出来ないんですか…？」

「和美様…」

朱雀は困ったように顔をしかめた。

「貴女は基本的に人を守る…つまり、結界を張る事に向いています。しかも、和

美の霊力はまだまだ発展途上です。今はそのお力を大事にしてください」

和美は俯いてしまったが、納得していた。

「行きましよう、沙羅様」

沙羅は右手の人差し指と中指だけを立て、印を結んだ。

「復唱願います」

『自然の理と壊れる理・紅の木々と碧の新緑。十七の珠・回復』
二本の指の間から放たれる暖かい光。

それは、春の日差しを思わせ…

また、母の温もりさえも与えるものだった。

「神もどきに操られてしまう人は、心に何等かの闇を抱えています。
その隙間に

囚われてしまうのです」

未だに珠を結んでいた沙羅は複雑な思いで聞いていた。

その時白い閃光が走り、現実に引き戻された。

「白虎…」

治療を終えた沙羅は、沢の元に駆け寄った。

「沢…大丈夫？」

「ああ…頭が少し混乱しているが、大丈夫だ」

「そう…」

その言葉を聞いて安心した沙羅はニッコリと笑った。

「なあ…沢先輩と沙羅ってどういう関係？」

「え？…つと」

「従兄弟だ。問題でもあるか？」

「従兄弟お！？」

「うん。昔はお兄ちゃんって呼んでただけだね。中学に入ってから、ややこし

いから変えたんだ」

「呼び方をな」

「うん！だって沢って呼べって言うから」

沙羅はふふ…と笑った。

すると、純は武道館の壁掛け時計を見た。

今はまだ9時だ。

「とりあえず学校に帰んねえ…？忘れてたけど、今日って…」

純が青ざめる。

「し、終業式っ!?!」

沙羅は青龍の方をキッと振り返った。

「何だ?」

「今すぐ学校に連れて帰って!!」

「仕方ない……」

青龍はパチンと指を鳴らした。

ふわりと足元が不安定になる。

「な……っ……」

正直、またかと思ったが体が慣れていないせいか、声上がる。

「着いたぞ」

青龍はぶっきらぼうに言った。

「とりあえず行こ!!まだ間に合うっ」

「はい!!」

暗い洞窟の中で二人、主従関係の男女がいた。

「青の姫の能力が目覚めたな」

頭から深く布を被った男が言う。

「申し訳ありません…白の帝おうも殺し損ねました」

腰より長い銀の髪を揺らしながら、黒い着物を纏った女が言った。

「気にするな。三人が四人に増えた所でも変わりはない」

男はくくつと喉を鳴らして笑った。

「しかし…青の姫君は少々厄介だな…あき亜桔、青の姫君をこちらの力

にしたい。頼

まれてくれるな?」

亜桔と呼ばれた女は深く頭を垂れた。

「重々承知しております」

女は立ち上がり、洞窟を出た。

「亜精。死ぬなよ」

「承知致しました」

第十七話

「やっと学校終わったな…」

純が椅子の背もたれに寄り掛かり大きく伸びる。

「じゃあ、通知表を返すわよ」

先生の言葉に嫌だと騒ぐ生徒、早く返してと喜ぶ生徒。みんなの反応は様々だ。

「はいはい、静かに。小学生みたいな反応しないの。じゃあ、1番の純君から」

出席番号1番の純が先生と共に廊下に出る。

「どう？自信の程は」

前の席の正実が沙羅に聞いてきた。

「あんまり聞かないでほしいな」

苦笑いで答えた。

すると、純が帰って来た。

「どうどう！？どうだった！?!?」

周りの男子が純の通知表を覗き込む。

「おい…」

「すげえ！？こいつ4と5ばっかだぜ!？」

純の後の竜が大声で言った。

「うつせーよ。5なんて三つしか無えだろうが」

「後は…3が二つ…後は全部4か…すごいわね」

男子の群れに紛れて沙羅と正実が覗き込んだ。

「うおい…沙羅、お前呼ばれてるぞ」

「沙羅さん」

先生が教室のドアから顔を覗かせていた。

「あつ！はい」

沙羅は慌てて廊下に出た。

「うん。よく頑張ったわね。他の先生も褒めていたわよ」

「え…？」

通知表を受け取った沙羅は歓声を上げた。

「やった！！5は…四つ！？やった！！純に勝った！！」
大喜びで教室に入っていた。

「どうだった？」

美佐と正実が聞いて来た。

「二人のも帰って来たら教えてあげる」

そんな様子を神界から水鏡で四人は見ている。

「やっぱり、私達の存在を知らずに暮らしていた方が幸せなのではないのかしら」

…」

朱雀は俯きながら言った。

他の三人は何も言えなかった。

「どうしても…私達がいたら普通の生活は無理だわ…」

「仕方がないじやろう…たとえば、それを純が望んだとしても受け入れてもらうし

かない…」

玄武も複雑だった。

「神って何とも自分勝手な生き物よね」

「先輩、今日も修業だと言ってましたけど…」

放課後、純と沙羅の元にやってきたのは和美だった。

「俺は行くけど…沙羅はどうする？」

「私は止めておく。やりたいこともあるし」

「そうか」

「うん。じゃあね」

沙羅はそう言つて歸つていった。

「先輩…今日の事を気にしているんでしょうか」

「多分な…自分の能力をコントロールできなかつたから…か」

沙羅は家に帰るなり、自分の部屋にこもつた。

今は家に誰もいなかった。

かえつて都合がいい。

まずは、自分の力を扱えるようにしなくては。

「え…っと…何だっけ」

言霊が思い出せない。

どうしたらいいか…

『大丈夫だ。お前には分かっている』

青龍の言葉が甦つた。

分かる…？

私に…

『四の泉に湧き出し水の精よ。青龍の主である我に使えよ。季立』

唄つた。

言霊を。

すると、四つの光が自身から飛び立った。

「…？」

それはまた次第に人型に変わった。

「小人…？」

沙羅は思わず呟いた。

『失礼ね。小人じゃないわよ』

紅いの光の人型が喋つた。

『何て説明するのが一番分かるかな？』

青い光も言つた。

『とりあえず…こんにちは、沙羅さん』

黄色い光の少年には羽があつた。

よく見れば、四人とも全部に羽が生えていた。

「鳥…じゃないよね？」

『ああ。俺達は各季節の特徴を司った神だ』
碧の光の人が言った。

「神様：四神とか、十二神将みたいな？」

『うん：ちよつと違うんだけどね。僕の名前は立夏』

青い光が名乗ると、続いて紅い光が言った。

『私は立秋。秋の神様よ』

『俺は立春。春の神だ』

「碧なのに春なの？立秋と立春って逆のイメージがあるね」

『うるせえ！！そんなことはどうでもいい』

『あーあ。沙羅さんに怒鳴っちゃって。私は立冬って言っただ』

黄色い光が言った。

沙羅はずいぶん賑やかな神様だと思った。

四神とは大きく違う。

沙羅は思わず吹き出してしまった。

『？』

「ごめんなさい…なんか久しぶりこんなに楽しくて」

『私達は沙羅さんにしか扱えないのよ。貴女が望む事以外は何もし

ない。だから

、しつかり私達をコントロールしてね』

立冬は笑って言った。

『うん…』

『一度使ったから分かると思うけど、僕は風を操るんだ。風化集結、
で風を刃の

ように鋭くできる。だから滅多な事には使わない方がいいよ』

立夏は苦笑いで言った。

それと同時に自分はそんなに危ない術を使ってしまったと後悔した。

『俺は、まあいわゆる幻影を見せるんだ。幻想夢幻。相手が一番見

たいと思っているものを

な。ちよつとばかり残酷かもしれないねえけどな』

「やっぱり立春って似合わないね」

『しょうがねえだろうが！！第一それはお前が望んだ事だ』
「私が…？」

第十七話（後書き）

2000人突破!!

ありがとうございます!!

私の小説を読んで下さっている方々と、応援してくれている友達に
大感謝です!!

コメントを下さった方、ありがとうございました。

早期更新で神恋、頑張りたいです!

第十八話

沙羅には身に覚えが無い。

それを望んだ？

「それってどういう事…？私が望んだ…って…そんな…」

『沙羅さん。それは考えなくてもいいことよ。私の事も一度使っているから分か

るわよね？薄氷流水で相手の感覚を全て無くすの。動きを封じるくらいにしか使

えないけど』

「そんなことないわ！！きつと立冬を一番使っちゃうと思うけど…」
沙羅が慌てて言うのと立秋が後髪を軽く引っ張った。

「うん？」

『最後は私よ。基本的に人間は空を飛べないけれど、飛翔空海、つまり私を召喚

すれば空中での戦いも可能になるのよ』

「すごい！！」

沙羅は本気で感動していた。

何にしろ、空を飛ぶ事は誰だって夢見る事だろう。

「私、今すぐ飛びたい！！立秋、使ってもいい！？」

『ええ！？』

「たぶん、まだ純達練習してると思うから…愛美ん家まで」

沙羅は驚いてる立秋を無視して、ベランダのドアを開けた。

「行くよ」

右腕を肩の高さまで掲げた。

「立秋・飛翔空海っ！！」

沙羅の掛け声と共に、立秋が右腕に絡んだ。

と、思った刹那には中に浮いていた。

「わあ…っ!!」

『無茶だね、沙羅さんは』

立夏の光が沙羅の横から言った。

「これって、普通の人には見えるの？」

『いや。でも、純君達みたいなたい人には見えるんだ』

「あ。愛美達だ」

説明している立夏をよそに、沙羅は立秋を離した。

沙羅が弓道場に飛び降りると、全員の注目を集めた。

「な…っ!!？沙羅っ!!」

一番最初に気付いたのは純だった。

なぜか彼は汗だくだった。

「沙羅先輩っ!!」

同様に驚きの眼差しを向けたのは和美だった。

「あはは。季立のおかげなんだ。すごいでしょ？」

沙羅は得意げに言った。

「季立？なんじゃ、それは。沙羅殿の能力か？」

そう尋ねてきたのは玄武だった。

「うん」

「コントロール出来るようになったようですね」

「ありがとう、朱雀」

朱雀にお礼を言った後、純と和美の方に振り返った。

「で。二人は何をしていたの？」

「俺達は、霊砲の練習。というか、実戦」

「実戦？」

「はい。実際に純先輩と珠で戦っていたんです」

どうりで。

沙羅は納得した。

二人が汗だくだったのはそういう事か。

「霊砲の珠を教えて」

沙羅は玄武に言った。

「私がか？」

「もちろん」

「じゃあ…両手を合わせて、靈気を込めなされ」

沙羅は言われたままに両手を合わせた。

「言靈を…」

『狩りし者！白の華が紅に変わりし時！！黒き者が再び清くに染まる！！二の珠・靈砲！！』

』

「……れ？」

全くと言っていいほど反応がない。

「えー…っと…」

沙羅が戸惑っていると、玄武がため息をつきながら言った。

「やはり、沙羅殿は攻撃的な珠向きではなさそうだな」

「でも…っ…！！」

でも、立夏は攻撃的な技である。

そう抗議したかった。

だが、あえて何も言わなかった。

たとえ立夏を自分が使いこなす事が出来ても、きつと攻撃できない。

沙羅はそう思った。

第十八話（後書き）

しばらく更新とろくなります。

それでも一週間に一回くらいは…

と、考えています。

第十九話

再び家に帰った沙羅は夕食を断り、部屋にこもった。

「私…どうしたらいいのかな…」

ベッドに倒れ込むと、目をつむる。

暗闇に引き込まれた。

聞こえる…

『何が…?』

声が…

ほら…

何か言ってる…

『沙羅……』

誰?

私の知っている人…?

違う…

『おいで…』

「…っ!？」

沙羅は確実なその声に目を見開いた。

鼓動が早い。

あれは…

鬼だった…?

仮面を被っていた。

暗闇の奥の方に…

限らない恐怖。

尽きる事は無い…

「私…」

胸に手を当ててみるが、自分の闇は見えない。

「明日から夏休みだ…いつも以上に戦いとか多くなるんだろうな…」
深いため息。

不安な心。

沙羅はまだ、自分に打ち勝つ術を知らない。

明るい…

沙羅は眩しさを覚めた。

時計に目をやれば、まだ5時。

もう一度寝てもよかったのだが、なんだかそれも躊躇われたので止めた。

家族を起こさないようにそっとベッドから降りると、カーテンを開けた。

眩しい朝日が目に刺さった。

「うん……っ」

大きく背伸びをすると、窓の下に目をやる。

「んな!？」

思わず出てしまった自分の声に驚きつつ、再度確認。

「な……」

そこにいたのは紛れもなく、純と和美。

勢いよく窓を開けた。

「どうしたの!？なんかあつ……た……」

大声で叫ぶ沙羅に、純は右手の人差し指を自分の口に当てて見せた。

「あ……」

今は早朝だと気付き、口に手を当てた。

ちよっと待ってて、と二人に言っつて、沙羅は適当に動きやすいワンピースに着替

えた。

長い髪も、低い位置で一つに束ねる。

「よ…っと」

沙羅は窓に足をかけた。

「ちよっと待て…」

純は目をむいた。

だが、沙羅は平気な顔をして謡った。

「立秋・飛翔空海」

沙羅は驚く二人をよそに、二階の窓から飛び降りた。

立秋はゆっくりと沙羅を地面に降ろす。

「ん。立秋、上出来」

人型に戻った彼女を見て、沙羅は微笑んだ。

「おはよ、純、和美」

二人を振り返り、再びにこりと微笑んだ。

すると、立秋が沙羅の髪を引っ張った。

「ん？」

『馬鹿でしょう、貴方！！こんな些細な事に靈力チカラを使って！！もっ
たいない』

「あら心外。こんな些細な事でも修行よ」

そう言った沙羅に対して、もう、と言いながら立秋は沙羅の中へ戻
っていった。

そんなやり取りの中、呆然としていた二人を見て言った。

「こんなに朝早くどうしたの？」

「あ…ああ、夢の中で早朝から修行したほうが靈力が上がるって玄
武が言うから

」

純はしどろもどろに言った。

「ふうん…じゃあ、沢も誘った方がいいわよね？」

「沢さんは…白虎さんがあまり関わらせたくない、と言っています
た」

「そう…」

沙羅は少し残念そうに言った。

「そんじゃ、愛美ん家に行ってみつか」
純の言葉に沙羅は、あれ、と頭を傾げた。
「愛美ちゃんに連絡してあるの？」
「ん？ああ。一応な…」
「ふ…ん…」

「朝早くからごめんね」
「いえ。弓道場にはいつでも行けるので」
愛美と共に弓道場に向かった。

途中、純は自分の胸に手を当てぼそりと呟いた。
「来い、玄武」
すると、純の隣に黒い光が舞った。
「…え」

沙羅は思わず目を見張る。
純の横には玄武が歩いていった。

「純…あんたいつの間に永昌破棄なんて…」
「ああ。俺、相当玄武を呼び出してっから」
沙羅の隣にいた和美も一言だけ唱えた。
「来て、朱雀」

玄武と同じように、朱い光が和美の隣に降りた。
「和美まで！？ひどい…私だけおいてきぼり…」
「つべこべ言わず早く青龍を呼べ」

純の言葉にむっとしつつも、長い言葉を唱えた。
「東の地に馳せし龍神よ、蒼の色を持つ神よ、四神の主である我に
神を使わせよ。出陣・青龍」

「まったく…まだお前は永昌破棄もできないのか」

青龍は馬鹿にしたように言った。

相変わらずの無表情にうんざりしたが、凶星なので何も言い返せない。

「それでは修行、頑張ってください」

愛美はそう言っただけで家に帰った。

「何か久しぶりな気がするね、青龍」

自分よりも背の高い青龍を見上げて言った。

「ああ、そうだな……」

「ほれほれ。今日は実戦に入るぞ。説明をよく聞いておくんじや」

第十九話（後書き）

7月22日

トップにギャラリィ追加。

ちよこつとのぞいてってください。
青龍達います。

第二十話

今日の修行内容。それは神と主がペアになり、二対二で戦う。

「まずは、私達、和美様と純様の所ね」

朱雀は微笑みながら言った。

純と玄武は何やら打ち合わせをしている。

「んじゃ、いっちょやってやるか」

純はそう言っつて右手を上には振り上げた。

そこには短刀が握られていた。

「始めっ！！」

沙羅の掛け声と共に、四神二人の姿が消えた。

それと同じ時、短刀を持った純と緋色の刀を持った和美が切り掛かった。

激しく鉄がぶつかり合う音。

「玄武！五十の珠！！」

純の声と共に、黒い光が和美の背後に凄いスピードで回った。

「朱雀！三五の珠っ！！」

和美も叫んだ。

すると、黒い光は弾かれるようにして離れた。

「すっ…」

沙羅は呆気にとられた。

「四神を使いこなすということは、こう言う事だ。意思が強くなければ負ける。」

強ければ勝つ」

青龍は厳しい目で戦っている四人を見た。

「青龍…」

沙羅がそう呟いた瞬間、純から声が上がった。

「沙羅ッ！！和美が…！！」

純の指差す方を見ると、和美は弓道場の外れの岩に飛ばされていた。

「和美様っ!!」

朱雀が駆け付けようとしたが、間に合わない。

「…っ!立秋ッ!!」

沙羅は和美に向かって立秋を投げ放った。

立秋は朱雀より遙かに早いスピードで和美と岩の間に入り込み、和美を浮かせた。

立秋はそつと和美を地面に降ろした。

「う……」

「和美ちゃんっ!!」

全員は一斉に駆け寄った。

「大丈夫か?」

純が和美の顔を覗き込むと、恥ずかしそうにごめんなさいと言った。

「いや…悪いのは俺だし…」

「沙羅さん…」

朱雀が縋るような声で名を呼んだ。

「分かってるわ」

両手を前にだす。

言霊を言おうとした沙羅の髪が引っ張られた。

「ん?」

『私を忘れないでくれないかしら』

立秋がむすつとした顔で言った。

「ごめん。お疲れ様」

沙羅はそう言っつて、立秋を自身に治めた。

「十七の珠・回復」

両手から温かな光がほとばしる。

「すげえな。回復術で永昌破棄かよ」

純は関心したように言った。

「うん。これは結構練習したんだ」

「へえ……」

和美の傷が大分治った所で沙羅は術を止めた。

「じゃあ、次は俺と沙羅だ」

純は自身満々に言った。

「いいわよ。受けて立とうじゃない」

「おい……」

青龍は沙羅に少し短めの刀を渡した。

「ん。ありがとう」

沙羅は笑ってそう言うと、純と一定の距離を置いて向き合った。

青龍は沙羅の斜め後に回る。

「始め……」

朱雀の声が響いた。

「な……っ……」

朱雀の声とほぼ同時に純が切り掛かって来た。

「……っ」

力が強い……

余りの強さに沙羅は顔を歪めた。

「玄武！二の珠だ……」

純は力を弱めずに叫んだ。

後に霊気を感じる。

「青龍！結界お願い……」

沙羅は叫んだ。

「立秋……っ……」

紅い光が沙羅な周りを徘徊する。

そして、沙羅の体を持ち上げる。

「なん……っ……」

のしかかっていた相手が突然いなくなり、純はバランスをくずした。

「てめ……っ……！卑怯だぞ……！玄武……っ……」

空中に浮いた沙羅に向かって、純は玄武を放つ。

「わっ……っ……」

玄武の攻撃をぎりぎりでかわし、青龍を純に向けて放つ。

「青龍……！霊砲……っ……」

青龍が純を攻撃したのを確認してから、沙羅は地面に降りた。

「立秋、もうしばらく待機しててね」

沙羅は背後に戻った青龍を振り返り、何か言おうとした。しかし、喉が詰まる。

「…っ」

青龍は純と玄武に気を取られていて気付かない。

「青龍っ！！行って！！！」

沙羅は声を振り絞って叫んだ。

青龍は沙羅の言葉に従う。

「…っ…っか…っ」

息が…できない…

『チガウ…』

なにを…

『オマエハソコニイルベキ、ニンゲンジャナイ』

やめて…

『コチラニコイ…』

ヤメテ…

『コイ…』

「……………っや！…！！！」

沙羅は耳を塞いでしゃがみ込んだ。

しかし、それと同時に純が霊砲を放つ。

「やば…っ…っ」

純は咄嗟に手を引いたが遅かった。

そして、彼女は動こうとしない。

「沙羅っ！！！」

青龍はその名を呼び、純の霊砲より速く沙羅の元にたどり着き、抱

きしめた。

「…っ!？」

霊砲をまともに受けた青龍は痛みに顔を歪めた。

沙羅は青龍の腕の中でがたがたと震えていた。

「…は…っ…」

「大丈夫ですか？」

朱雀は穏やかな表情で二人の顔を覗き込んだ。

第二一話

「一体、何があつた？」

青龍は落ち着いた沙羅に問い掛けていた。

朱雀は無言で彼の傷を治している。

「分からない…分からないの…私…」

いつの間にか高く昇った太陽が六人をきつく照らしていた。

「まあまあ、そーんなに沙羅ちゃんを責めなくてもいいじゃない？」

深刻な空気をぶち壊すような呑気きわまりない声が弓道場に渡った。

「…お前が何でここにいる」

青龍は明らかに嫌そうな顔で言った。

異常なほど明るいその声の主。それは…

「白虎！！」

朱雀はらしからぬ声を上げた。

また、沙羅はその後の人物の名を呼んだ。

「沢！何でここに？」

「嫌ね、白虎がやつぱり修行しに行こうって言うから」

今日の沢は、男子にしては長い、背中までかかる髪を結わずに流していた。

「それで？何があつたか教えてくれるかな？」

白虎は満面の笑みで言った。

「ごめんなさい。本当に分からないんです。私、どうかしちゃったんでしょうか…」

沙羅が不安げに白虎に視線を送ると、彼は右手を沙羅の瞳の前にかざした。

「私の右手には紅い紐。私の左手には黒い詠。神の右目・人の左目。八九の珠・神聖心眼」

白虎の体全身から光が溢れ出す。

かと思えば、それらは一気に沙羅の身体に入り込んだ。

「な……っ……」

さすがに沙羅も驚いたが、体が動かない。

「ん……」

白虎は沙羅の目の前にてをかざしたまま、瞳を伏せる。

「ん……青龍、こりゃあ天后殿に一度見てもらう必要があるな……」

「天后に？」

「ああ。変なモノに見込まれてるかもしれないな……」

「で。何であんなに半強制的に神界こいつに連れて来られなきゃいけないのよ」

沙羅は今、神界の朱雀の部屋にいた。

朱雀は審神に話しをしてくると言っつて、部屋を出たきり十分ほど帰つてこない。

「良いじゃないですか。ここは、とつても落ち着きますし」

和美は妙に和んでいた。

いや、元々そういうおっとりとした性格なのか。

すると、朱雀が部屋に戻つて来た。

「お帰りなさい」

和美はにこやかに言つた。

「お二人はまず、着物に着替えて下さい」

そう言つて二人は渡された着物を見た。

「あの……これ、着方分らない……」

沙羅が朱雀に言つと、彼女はああ、と言つた。

「ごめんなさいね。六合を呼びましたから」

しばらくすると、一人の少女が部屋に入って来た。

「はじめまして、青の姫君。私、十二神将の六合と申します」

六合の背丈は沙羅とあまり変わらず、歳も同じ年ぐらいだろうか。六合は手際よく、沙羅に着物を着せた。

「わ…すごい……」

沙羅の着物は薄い緑色に、薄桃色の花柄。袖には薄い青。

夏用の腰掛けは薄い黄色に、朱色で縁取ってあった。

薄めの色で統一された沙羅の着物は昔、朱雀が着ていた物らしい。引き換え、和美は背丈が小さめなため、子供用の着物だった。

明らかに和美は嫌そうだった。

「じゃあ、沙羅さんは青龍の部屋に行つて下さいね」

朱雀は華やかに笑つて見せた。

「はあ……」

曖昧に頷いて朱雀の部屋を出た。

相変わらず、神界の外には薄く霧がかかっていた。

「夏だつていうのに、ここは肌寒い……」

自分が今着物であることに少し感謝した。

しかし、朱雀の部屋からだいぶ離れた所で気がついた。

「あー…つと…青龍の部屋つてどこだろう……」

審神の屋敷は異常なほど広い。

朱雀に聞いてから行くんだつたと、今更後悔する。

すると、一人の青年が近くの部屋から出て来た。

「あつ…あの、青龍の部屋つてどこですか？」

思い切つて尋ねると、彼は穏やかに笑つた。

「貴女はもしか、青の姫ですか…？」

「はい……」

「そうでしたか。私は大陰たいおんと申します。以後お見知りおきを」

「はあ……」

「それでは恐縮ながら、私が青龍殿の部屋にご案内致します」

大陰はそう言つて歩き出した。

しばらく廊下を歩くと、離れのようなものがあつた。

「あそこです。ここからはお一人で……」

大陰は深々とお辞儀をすると帰つていった。

「なんか、青龍て変わり者なのねえ……」

と、一人ごちると本堂と離れを繋ぐ渡り廊下を歩いていった。

「あの……青龍……？」

閉じた襖ふすまの前でその名を呼ぶが、返事はない。

第二一話（後書き）

7月24日

3000人突破！！

いつも、こんな駄目小説を読んで下さっている方々。

本当に有り難うございます！！

これからは、ちよっとラブラブを目指してみます。

次回、ちよっと期待してみてください…

第二二話

いくら待っても返事がない。

「青龍…?」

不思議に思った沙羅はそつと襖を開けた。

「あ…寝てる…」

なるほどと思いながら、部屋へと足を踏み入れる。

青龍は物書き机に伏せるようにして眠っていた。

「何にもない…殺風景ね…」

青龍を起こさないようにしながら、辺りを見回す。

がらん、とした部屋の隅の机には、大量の書物と花が飾ってあった。

『何で花だけ…?』

沙羅は変な疑問を抱いた。

「う…ん…」

沙羅の存在に気付いたのか、青龍が目を覚ました。

「あ…ごめん。起こしちゃった…?」

「いや…」

青龍はまだ眠いのか、ぼんやりしていた。

しかし、沙羅が側に寄ると、僅かに目を見開く。

「それは…?」

「ん?ああ、これ?」

沙羅はそう言って自分の腕を、着物の袖と共に持ち上げた。

「朱雀から貸してもらったの。制服じゃ目立つからって」

「…そうか」

青龍は沙羅の方を向いたまま、ほお杖をついた。

結わずに流してある黒髪がさらりと肩から流れ落ちた。

沙羅はそんな青龍の横に正座して言った。

「どうかした?」

「いや…似合っているな…」と

「な…っ…!!」

沙羅は耳まで真っ赤になるのが自分でも分かった。
ドクン…

鼓動も、早い。

『っわ…私…どうしたんだろう…』

青龍らしからぬ言動に戸惑った。

「っ…くく…」

だが、肝心の青龍は可笑しそうに吹き出した。

「なっ…何よ!!」

沙羅はムキになって聞き返した。

「本当にお前は賑やかだな…」

そう言つて、優しく微笑んだ。

それは、滅多に見せることのない笑顔。

沙羅も自然と笑みがこぼれた。

「ねえ、青龍…」

「何だ？」

「あの…さ…」

沙羅が何か言おうとすると、青龍が机から顔を上げた。

「どう…」

どうしたの？

そう聞く前に、青龍は人差し指を自分の口にあて、静かにするよう
に促した。

沙羅は素直に従う。

「？」

青龍は立ち上がると、襖を開けた。

だが、部屋の前には誰もいない。

「少し冗談が過ぎるんじゃないか？」

青龍は聞き取りにくいほど低い声で言った。

すると、誰もいない場所から明るい笑い声が聞こえた。

「まあまあ、何とも愛らしい姫様ですね…着物がよくお似合いにな

りますこと」

沙羅は正座をしたまま、きよんとしていた。

「天后、見えてないぞ」

「ああ。そうでしたわね……」

その女は姿を現した。

「貴女は……？」

「十二神将の天后」

天后が答えるよりも早く、青龍が答えた。

なるほど、彼女には天女、又は女神と称するのがとてもよく似合う人だった。

「ふふ……青龍様は相変わらずですね」

「あい……かわらず……？」

沙羅は再び困惑した。

「天后。そんな事はどうでもいい。早くこいつを見てやれ」

青龍は入口で腕組みをしたまま言った。
すると、天后はクスクスと笑った。

「承知しております」

そう言って、沙羅に座るように促した。

「あの……」

「大丈夫ですよ。じっとしててください」

天后は沙羅と向き合うようにして座ると、両手を前に差し出し、珠を唱えた。

『天女が音を奏でる時・女神が神を越える時・人の空を犯す者なり』

「……………」

沙羅は目を閉じていた。

「ああ……これはまた、凄い者に捕われたわね……」

天后は誰に聞かせるでもなく呟くように言った。

「それは一体何なんだ？白虎も同じような事を言っていた」

青龍は天后の隣に立ったまま言った。

「鬼ね」

「鬼？」

「ええ。神もどきの事を人間は鬼と呼ぶわ」

天后も腰を上げた。

「なるほどな…つまり、鬼はこいつの力を狙っている訳だ」

「そう…特に、立夏や立春なんかは私達神にも通用してしまうから。鬼にとって

は絶好の獲物だわ…」

沙羅は未だに目を伏せたままだったが、頭がくらくらした。

「今は絶対に沙羅さんから目を離してはいけないわ」

第二三話

「だからって、ここまでする必要があるの…?」

人間界に戻った沙羅はベッドに腰掛けながら言った。

「仕方ない。鬼はお前の中に居るんだ」

「じゃあ、なおさら意味ないじゃない」

はあ、と深くため息をついた。

しばらくの沈黙が続く。

すると、沙羅がそういえばと、口を開いた。

「青龍って私の名前知ってる!？」

「当たり前だ。『沙羅』だろう」

「じゃあ、ちゃんと名前で呼んでよ。いつも、『お前』とか『こいつ』とかじゃない？」

立っている青龍に満面の笑みで言った。

「……………」

黙り込んだ青龍は俯いてしまった。

「青龍…約束しよ？」

沙羅は右手の小指を差し出した。

しかし、青龍はそんな沙羅に背を向けてしまった。

「……………分かった」

聞きづらいほど低い声だったが、沙羅はにっこりと笑った。

「あと、もう一つ聞きたい事があるんだけど…」

「何だ」

相変わらずそっぽを向いたままの青龍に向かって言った。

「青龍の部屋にあった花ってどうしたの？」

「ああ。あれは、朱雀から貰った物だ。秋桜あきくと言ったか」

「コスモスの事かしら? 何で……………」

何で朱雀は青龍にコスモスなんかあげたのだろう。

まさか……………」

沙羅の脳裏に一つの考えが浮かんだ。

「ねえ…青龍と朱雀ってどうゆう関係？」

「四神」

「そうじゃなくて…」

あまりにもあっさりとした答えに、些か脱力する。

「恋人同士だ」

「……っ!？」

ドクン

沙羅はきつく拳をにぎりしめた。

鼓動が早くなる。

嫌な汗が背中を伝った。

「そう答えて欲しかったのか？悪いが、少なくともそうだった関係ではない」

少なくとも…

その言葉が頭から離れなかった。

沙羅は無言のままベッドに潜り込んだ。

「どうした？」

「何でもない…帰っていいよ」

青龍とは反対の壁側を向いていた。

どちらかというと、帰ってほしい。

早くこの場から立ち去ってもらいたい。

「お願いだから…帰って」

震える声押し殺し、言った。

「分かった」

青龍はそれだけ言って姿を消した。

「何でよ…」

嫌だった。

どうして…？

何が？

誰が？

嫉妬

たどり着いた結論。

分かった答え。

「私…朱雀に嫉妬してる……？」

そっか…

やっと分かった…

「私…青龍の事好きなんだ……」

「何なんだ…全く…」

帰れと言われたが、青龍は沙羅の家の屋根に座っていた。

「沙羅…」

誰に聞かせるでもなく呟いただけだったが、不意に答えが返って来た。

「何じゃ？喧嘩でもしおったか？」

「なっ…！？」

後を振り返れば、玄武が立っていた。

「純はどうした…？」

一人ね時間を害されたのが気に食わなかったのか、不機嫌な声を出

した。

「いやいや。純は立派な主じゃからな。安心できる。心配なのはお前達じゃ」

「喧嘩は…してない…」

「怒らしたんじゃな…全く…」

青龍の隣に腰を下ろすと、どこからか酒を出した。

「体に悪いぞ」

「かまわん。少量なら良薬じゃ」

そい言つて、にかつと笑つた。

「なあ青龍…この際本当の事を言つてしまえば…」

「玄武。冗談は止せ。まだ早い…」

月明かりの下で、青龍の深青色の瞳が玄武を射た。

「そうじゃったな…だが、くれぐれも沙羅殿にはばれないようにな

…」

「分かっている…」

青龍は深くため息をついた。

第二四話（前書き）

ここからものすごくシリアスです。

ついて来られる方だけおいでください。

本当にひどいですよ…？

第二四話

「…ん……」

気がつけば、真つ暗闇の中にいた。

見渡す限り闇、というのはまさにこの通りなのだろう。

右か左か、前か後か。上か下か。

だが、不思議と恐怖感はなかった。

『何に悲しんでいる…』

声…

悲しむ…？

私が？

『こちらに來い。さすれば、その苦痛から解放される』

男の声。

だが、しかし…

「一番悲しんでいるのは貴方じゃないの…？」

だって…

語りかけて來られる声は明らかに悲しみを秘めている…

「どこか…痛い…？」

『気にするな。お前の元に、亜桔という鬼を出向かせる。返答はその時に』

「沙羅…？」

目を開けると、誰かが自分の顔を覗き込んでいた。

「…え？」

それまで、自分が眠っていた事さえ分からなかった。

「大丈夫？」

「お母さん…」

「何か…怖い夢でも見たの？」

「ううん…大丈夫。今って何時？」

外が明るいのは分かるが、時計が見えない。

「八時よ」

「んー…ありがとう…」

沙羅はそう言っつて、ベッドから下りた。

「本当に大丈夫？」

「うん。全然平気」

笑っつて言った。

だが、心は笑えない。

理由は簡単だ。

気付いてしまったから。

一階に行くと、電話の前に立った。

今日、修行に行くべきかどうか。

「やっぱり行くの止めておこう…」

受話器を取り、純の携帯に電話。

三回目のコールで、純が出た。

「もしもし？」
『沙羅か？もうみんな来てんぞ。青龍だって、ここにいるし…』
「うん…今日はちょっと止めておく…」
『大丈夫か？何かあったのか？』
「大丈夫。青龍には…帰ってもらって…」
『沙羅…お前…』
「ごめん…じゃあね」
『あ！おい…』

強制的に切った。

「切れた…」
半強制的に切られた携帯を見つめながらしばらく呆然としていた。
「先輩、沙羅先輩どうしたんですか？」
和美が純に尋ねて来た。
「あ…いや、なんか…」
そういえば…
「青龍…お前、昨日沙羅と何かあったな…？」
純は声音を落として言った。
「な…！？」
すると、和美も純の肩を持った。
「なほど！！沙羅先輩を怒らせちゃったんですか！？」
「何だ、やっぱりそうじゃったか」
「玄武…てめえ…」
「あら。何？沙羅さん襲っちゃったの？」
「はあ！？朱雀何言って…！」

「何だと！？中々やるな、青龍！」

「白虎…」

調子にのって人間に加勢する他の四神に怒りを覚えた。

そんな騒ぎの中、沢だけが冷静かつ集中して珠を唱えていた。

「おい青龍っ！！沙羅に何言っただんだ！？」

「何も言っていないと言っているだろう！！」

純の言葉に抗議しながらも、沙羅の事を考えていた。

その時だった。

「……五の珠・束縛」

沢の放った珠は見事に純に命中した。

「な…ん…」

いきなり体の感覚が失せた。

体の自由が奪われたとしか言いようがない。

「あ………」

沢は見た目と大分違って、天然と言っているほどいいほどの性格である。

「え…つと…」

どうしたらよいか迷っている沢に全員の注目が集まる。

「あの…俺、この珠の解き方知らないんだけど…」

「『解』と言えばいい」

青龍は腕組みをしながら言った。

沢は、なるほどと納得しながら珠を唱えた。

「わっ…！！！」

いきなり珠が解けたせいか、純の体が地面に倒れ込む。

「…つてえ………」

「流星は沢だな」

関心したように白虎が言った。

「はあ…ありがとう」

「あら。修行ははかどっているようですね」

くすくすと笑いながら愛美が弓道場に入ってきた。

「どうなんでしょう？」

和美は笑って青龍達を見た。

「でも、楽しいわ」

「そう。それはよかった」

第二五話（前書き）

やばいです。

本当に大丈夫ですね？

批判は受けませんよ！！！！

第二五話

「……やっぱり修行、行ったほうがいいかしら……」

勉強のために机に向かっていた沙羅だったが、集中できずにベランダの戸を開けた。

「立秋……」

ぼそりと呟いただけだったが、立秋は自身から姿を表した。

『何か悩んでる?』

『何でもない…愛美の家までお願い……』

『了解』

立秋は沙羅を持ち上げ、愛美の家に向かった。

「ちょっと休憩…すっげえ疲れたんですけど」

「文句を言うな」

玄武が純を制す。

「お疲れ様です。昼食を用意しましたので、家へ上がってください」
愛美はにっこりと笑って言った。

「ここ最近、愛美はよく笑うようになったと思う。
前の固い印象も薄れて来た。」

「そういえば白虎。神様って、ご飯食べるの?」

「いや…基本的には食べないが……」

「へえ……」

沢は妙に感心していた。

しかし、その後で青龍と朱雀は何やら声を潜めて話していた。

「朱雀ーっ！青龍さん！おいていつちやいますよ！！！」

だいぶ離れた場所で、和美が二人を呼んだ。

「和美様。先に行つててください」

和美は明るく頷き、走っていった。

「無邪気だな」

「ええ」

しかし、穏やかな朱雀の瞳は一瞬にして変わった。

「それで？話して何かしら」

「お、沙羅。大丈夫か？」

いち早く沙羅の存在に気がついたのは沢だった。

「うん…ちよつとね…」

沙羅は全員の顔を確認したが、青龍は見当たらない。

「あれ…？青龍は？」

「青龍さんと朱雀はまだ弓道場に残っています」

和美があまりに明るく言ったので、違和感を覚えた。

「ちよつと見てくる！！！」

「あ、おい……」

純の制止にもかかわららず沙羅は弓道場まで駆けて行ってしまった。

「えーっと…確かこつち……」

二つ目の角をまがった所で、二人の話し声が聞こえた。

「え……」

思わず、角をまがり切らず立ち止まった。

否、体が動かなかつた。

そこで語られている事が事実なら…

私は

「どうしても好きなんだ…」

青龍の低い声…

苦しそうな…

足が…

すくむ…

「二度と離したくない」

「青龍…」

青龍をなだめるような朱雀の声も、困っているようだった…

「愛してるんだ…朱雀…」

第二五話（後書き）

ああ…

やってしまった…

青龍と朱雀に作者失望中…

おい

第二六話

どこをどうやって走ったかは、覚えていない。

ただ、逃げるように愛美の家を出た。

純や和美が待て、と叫んでいた気もする。

立秋を使う事すら頭が働かなかった。

気がつけば、見知らぬ洞窟に来ていた。

「は……っ」

ずいぶん長い間走ったのか、息が上がっている。

いや、それだけではないだろう……

「……っ」

どうしようもなく、涙が溢れてくる。

拭おうとはしない。

洞窟の壁に寄り掛かると、息を整える。

しかし、涙は止まらない。

やっぱり、青龍は朱雀の事が好きだったんだ……

それは、決定的な青龍の言葉。

疑いようのない、言葉。

その時、背後から声がかかる。

「結論はでした？」

「!?!」

驚いて振り向くと、銀髪の女性が立っていた。

「初めてお目にかかりますね、青の姫君。私、あま亜桔あまといいます」

「鬼……ね」

「はい」

沙羅はさほど驚いてはいなかった。

「沙羅様、ご返答を願います」

「嫌よ」

「しかし、あなたはもう青龍と共に戦えないはず。それでもよろしいのですか」

「？」

「!？」

「あなたには季立がまだ存在します。こちら側について頂ければ、その力は倍以

上にも跳ね上がるはず…」

亜桔は優しく、穏やかに言った。

しかし、沙羅は逆に違和感を感じた。

「私の力を利用するつもり…？」

「ご協力いただけますね…？」

亜桔の声色が明らかに変わった。

重く、低い声へと。

「嫌よ!!」

沙羅は叫んだ瞬間に体をかがめた。

ヒュ…ツ…

『かまいたち!？』

左腕を支えにして重心を後ろに移動する。

「……っ!？」

左腕に鋭い熱が走った。

それは遅れて激痛に変わる。

「沙羅様…ご承諾を…」

「嫌ったら嫌!!」

「ならば、力づくで従わせるまで!!」

亜桔は両手を広げた。

何かが起きる。

沙羅は反射的にそう考えた。

させない!!

「立夏・風化集結ッ!!」

沙羅は右腕で亜桔目掛けて立夏を放った。

しかし、次の瞬間に沙羅は両腕に激痛を感じた。

「な……」

目を見開く。

そこに居たのは…

第二六話（後書き）

ブログ作りました。

`http://sizinnoyakata.jugem.jp/`
です。

日々つらづらしています。

よかったら来て下さい。

第二七話（前書き）

ここから流血注意です。

苦手な方は回れ右ですよ。

良いですか？

後悔はなしですよ。

第二七話

「あなた…亜…桔…？」

眼前に居たのは、頭に角が生え、背には翼のある、白馬。

「ペガ…サス…」

見た目はそう。

だが、しかし…

「違う！！ペガサスは神…よ…」

そこまで言つて、気がついた。

そうだ…

亜桔達鬼は、神と認められなかった者達だと。

「そうよ。私は審神に、人形ではないがために神と見なされなかった！！今でこそ

人形をとれるようになりましたが、あのお方だつて…あのお方だつて、元は審神

に並ぶ程の力をお持ちだわ！！」

鋭い叫びに、沙羅は啞然とした。

最早、誰が悪いのか分からなくなってきた。

「だから、どうしてもあなたの力が必要な。解る？」

「分からないわ！！」

「黙れ！！」

沙羅は本能的に生命の危機を感じた。

「っ…あ！？」

ついに、痛みに耐えられなくなった沙羅はその場に膝をついた。

今の一撃は、両腕の感覚が一瞬麻痺するぐらいとてつもなかった。

しかし、次の瞬間には激痛に変わっていた。

「く…は…っ…」

自分の体重を支えられなくなり、洞窟の壁によつ掛かった。

大量の血が流れ出るのが分かる。

「これで、あなたはもう季立を出せない。おとなしく私と一緒に来なさい」

「嫌よ……」

執拗に腕を狙ったのはそのためか、と沙羅は一人ごちた。

呼吸が苦しくなる。

目の前も、霞かすみみ始める。

「私は……諦め……ない……」

沙羅は途切れ途切れに珠を紡いだ。

「十七の……珠……回……復……」

しかし、傷は全く良くならない。

むしろ痛みが増したようだ。

「しょうがないお嬢さんね……」

白馬の瞳は悲しいほどに、冷たかった。

「本当は、両腕を切り落としてもよかったのだけれど……そうしたら、

季立きりつが使える

なくなってしまうものね……」

「……っく……」

白馬は再び人形ひとがたに戻り、怪しげに微笑む。

ゆっくりと沙羅に近づきながら問い掛ける。

「協力していただけますね……？」

「……っ……」

その時

「沙羅っ……!! 答えるな……!!」

ほぼ、叫びに近い声が飛んだ。

「……？」

働かない頭で必死に考える。

なぜ、今彼がここにいるのか。

眼前も霞み、定かではない。

だから、幻かもしれない。

「沙羅っ！！」

「沙羅先輩！！」

続けて二人の人に名を呼ばれた。

「動かないで…」

沙羅の首に刀を向けながら、亜桔は静かに言い放った。

「貴様…沙羅殿を人質に取るつもりか！？」

玄武は怒りを表にした。

「人質…？そんな意味を成さないことを私がすると思つ…？」

口元だけで薄く笑った亜桔は更に続けた。

「この子を人質に取った所で、あなた達四神が死ぬ訳でもないのだし…そうね、

あなた達の動きを止めるくらいだったら使えるけれど」

四神、そしてその主は全員身構えた。

何か来る。

その場の空気が変わった。

亜桔は再び妖化をした。

「なっ！？」

純、和美、沢は驚いて声を上げたが、四神はいたって普通だった。

「本性を表しおつたな…」

「まったく、往生際が悪い鬼だ」

玄武と白虎は半ば呆れ声で言う。

「青龍、私と和美様は沙羅さんを助けて手当てするわ。あなたは戦前に加わって」

「分かった」

青龍は龍矛を握ると、玄武の横に並んだ。

「いくぞ」

白虎の掛け声と共に、四神は四方に散った。

「目くらましのつもりか!？」

洞窟中に亜桔のかまいたちが飛び散る。

「玄武つ!!!」

しかし、純はそれに怯む事なく攻撃する。

そんな中、朱雀と和美は沙羅に駆け寄った。

「沙羅さん!!!」

「先輩、大丈夫ですか？」

和美は心配そうに沙羅の顔を覗き込んだ。

「…ん…なんとか……」

無理矢理に笑って見せるが、出血の量が多すぎて頭がくらくらした。

「待っててください。今すぐに治療します」

朱雀は沙羅の腕に、両手を当てた。

沙羅には一つひっかかる事が頭の中にあった。

どうして始めは自分を人質に取っていたのに、やすやすと手放したのか。

「まさか……」

第二七話（後書き）

わー！。

やってしまったよ。
これから本題です。

第二八話

まさか…

彼女の本当の狙いは…

「貴様：なぜまともに攻撃してこない…」

青龍は恨めしそうに睨んで言った。

すると、亜桔は楽しそうに笑った。

「そうねえ…なぜかしら？」

次の瞬間、青龍達の目の前から消えた。

「!？」

油断は、なかった。

決して目は離さなかった。

しかし、嫌な予感がして沙羅を見た。

「……っ…せ…」

沙羅の近くには、朱雀も和美もいた。

気付いていなかったのか。

亜桔は一瞬で沙羅の背後に回った。

「沙羅っ!!」

急げ。

俺の本能が告げた。

しかし……

「掛かったわね…」

亜桔の声。

ひとがた
人形の亜桔。

衝撃が腹部を貫く。

「く……っ……」

口から、生暖かいモノが顎に伝わる。

衝撃は激痛に変わる。

「青龍ッ!?!」

白虎の叫びが聞こえる。

自分の体が地面にたたき付けられるのが分かった。

「馬鹿ね…」

頭上で、亜桔が馬鹿にしたように言い捨てた。

意識が曖昧になる。

「『オニ』は一人ではないのよ」

「…っ…か…」

口で呼吸をしようと思ひ、咳込む。

血が肺に入ったようだ。

「哀れね…神ともあろうものが…」

「立夏ッ!?!」

「!?!」

沙羅の怒りが爆発した。

「…っ」

立夏の攻撃は確実に亜桔に当たった。

朱雀に治してもらったとはいえ、まだまだ痛む。

しかし、それすら感じない。

「あなた…」

切られた頬の傷を拭いながら、沙羅を睨んだ。

「…っ…許さない!!」

和美に支えられて辛うじて立っている沙羅だったが、靈力は膨れ上がっていた。

「何を…した…?」

沙羅の足元には、切れたペンダント。

それは、靈力をコントロールするためのもの。

それを自ら切り捨てた。

「許さないだと…?自分で立っている事もままならないのに」

和美に支えられ、ふらつきながら。

しかし、それでも亜桔をしっかりと見据えていた。

「じゃあ、正々堂々と戦いましょうか」

亜桔は勝ち誇ったように笑った。

「何が正々堂々よ!!」

和美は亜桔に向かって叫んだ。

すると、足からがくりと力が抜けた。

「っ…!!?」

「わっ!!」

和美に支えられていた沙羅もその場に崩れ落ちた。

「なぜ今までこんなに隙があったのに、四神が私に攻撃出来なかったのか分からなかったの?」

「……………」

「『束縛』よ。立ち上がらずにどうやって戦う?」

馬鹿にしたように沙羅を見下す。

しかし、沙羅は薄く笑って言った。

「だったら立たなければいいのよ」

そうして、叫ぶ。

「立秋っ!!立夏!!」

二つの光が沙羅を取り巻き、宙に浮かせる。

同時召喚

それは、靈力を全開にしているから出来る事。

「立春、立冬」

季立を全員召喚し、使うなど今までなかったせいか、こんなにも季立の召喚というのは腕を使うものなのか。沙羅は亜桔を睨んだまま、立春を見ずに言った。

「立春、青龍の傷治せる？」

『無理だな。専門外だ』

「じゃあ、幻影で痛みを和らげる事は？」

『出来るが…幻影が切れた時にキツくなるだけだぞ』

「それでもいい。お願い」

『分かった』

立春は青龍の元に行った。

後は、目の前の忌まわしい鬼を倒すだけ。

「どうやら、あなたと私の術は類似しているようね」

「似ている…？」

亜桔の言葉に沙羅は聞き返した。

「ええ。私もあなたもかまいたちを使う」

「違うわ。立夏はかまいたちなんかじゃない」

「同じ事よ」

「違う」

沙羅は冷静に言い放った。

立秋も沙羅の靈力が開放されたせいか、調子がいいようだ。

「立冬っ！！薄氷流水！！」

黄色い光が亜桔めがけて放たれる。

「…っ！？」

予想外の攻撃に、亜桔は身をよじる。

「立夏・風化集結っ！！」

洞窟内の空気が変わる。

沙羅に従い、刃と化す。

「残念ね…正々堂々とした戦いは私の勝ちよ」

「く……あ……っ」

亜桔は最期のあがきとも言える大量のかまいたちを連発させた。

「立夏っ！！」

それすら薙ぎ払うように無数の刃が亜桔を襲う。

同時にすさまじい爆風と爆音が、鳴った。

「……っ！！」

風に吹き飛ばされそうになるが、立秋が沙羅を支える。

しばらくすると、風も砂埃もおさまった。

「ありがとう、立秋」

お礼を言ったあとで、地面に下りる。

終わった、と一息つく間もなく、立春の声が耳を裂く。

『馬鹿野郎！！何していやがる！！青龍の息が止まりかけてるぞ！』

『！』

第二八話（後書き）

8月1日

ブログの方に神恋の短編小説を見つけました。
暇だったら行ってみてください。

<http://sizinnoyakata.jugem.jp/>
しつこいようですが、もっかいのせときます。

第二九話

「青龍っ！！」

駆け寄り、傷の程を見る。しかし、自分の力では到底直せないと自覚する。

「立春……」

『出血がひど過ぎるんだ。このままだと、死ぬのは時間の問題だな』
「そんな……」

それでも、何もしないよりはと、回復の珠を使う。

「沙羅っ！！」

束縛の解けた純達が駆け寄って来る。

しかし、彼らの受けた傷もひどかった。

「青龍は……？」

「駄目……全然よくならないの……このままじゃ……」

沙羅は青龍の頭を膝に乗せ、治らないと分かっているても珠を続けていた。

「朱雀は……？朱雀は治せないの！？」

首だけ朱雀に向け、懇願の瞳で尋ねる。

だが、朱雀は静かに首を横に振った。

「そんな……」

青龍の顔を見下ろした。

顔は青ざめていて、腹部からの返り血で所々朱い。

呼吸も浅く、辛そうだった。

腹部はかなり朱く染まって、手を当てている沙羅の手も朱い。

胸が上下しているから生きているとわかるが、遠くから見たら死んでいるようだ。

「……………」

俯いた沙羅の瞳から涙が落ちる。

それは、青龍の頬を伝って地面に吸われていった。

「青龍…このまま死んじゃうの……?」

誰に問うとでもなく、か細く呟く。

すると、小さくため息が聞こえた。

「ありますよ。青龍が助かる方法が」

「!?!」

沙羅は弾かれたように顔を上げた。

白虎はさらに続ける。

「神界に帰せばいいのです。しかし、今の彼にはそれだけの力は無い。沙羅さん

、あなたが強制送還するしかありません」

「強制…送還…」

青龍に聞いた事がある。

四神を強制送還させれば二度と呼び出せない。

「それに、ちから霊力を全て使います。つまり季立は使えなくなる上に、
霊な

るもの…我々を見る事、話す事も不可能になります」

「そうだったら、戦いから外れてもらわねばならん」

白虎の後に、玄武も言った。

しかし、沙羅は躊躇う事なく言った。

「いいわ。教えて」

沙羅の瞳にはまだ涙が流れていたが、迷いはなかった。

「青龍が死んだら、意味がないもの。それに、戦えないわ」

「……分かりました」

白虎は少し間を置いて言った。

「それでは、復唱してください」

沙羅は小さく頷くと、青龍の頭を幼子のように抱きしめた。

「少しだけ…待って」

白虎は首を傾げたが、少ししてから、どうぞと言った。

「季立…」

沙羅の体から出てきた四つの小さな神は、全員理解しているようだった。

「僕らなら大丈夫だよ。神界しんがいに居るから」

「まったく…仕方ねえなあ」

「分かっていますから。沙羅さんのお気持ち」

「そうよ。私たちはあなた自信なんだから」

季立は交互に言ってくる。

沙羅は苦笑する。

「ありがとう…」

そして、青龍の耳元で。

「さよなら……」

「よろしいですか？」

沙羅は小さく頷いた。

『我、この時にて争いを終決させし。此の神を失す事を願う。』

終焉

刹那

突風と共に沙羅の腕の中から重みが消え去った。

四つの光と主要の青い光は天高く舞って消える。

流れる涙に気付かないふりをして、見送る。

残った風は雪のような無数の青い光を落として行く。

沙羅は開いた傷だらけの腕でその光を受け止める。

「青龍………」

暖かい…

八月一日の夜の事だった。

第二九話（後書き）

8月2日

ここで一旦話（第一章）は切れます。

次は第二章の第一話。

二章・第一話（前書き）

四神・青龍の主として戦っていた沙羅だったが、青龍の思い人が朱雀だと思いこんでしまう。

そんな中繰り広げられた戦いで青龍は瀕死の傷を負ってしまった。

二度と青龍とは会えないという約束で、ぎりぎりの命を取り留めた。先の戦いで、青龍と別れた沙羅。

自分の思いを伝えることが出来ないままだった。

それでも純や和美は修行に励んでいた。

しかし、靈力の無くなった沙羅に新たな鬼が迫る…？

二章・第一話

青龍と出会って、たった二ヶ月間だった。

そして、彼と別れて三週間が経っていた。

一週間は伏せていたものの、沙羅は猛勉強を始めた。

理由は二つ。

一つは、受験生だから。

二つ目は、青龍を忘れるために。

ただひたすら机に向かった。

それでも夜は、泣いた。

相変わらず純達は修行をしているようだったが、一度もあれから行っていない。

行ったところで、何も出来ないし、むしろ邪魔になるだけだろう。

「ふう……」

ぎしりと、椅子の背もたれがきしる。

勉強が身に入らない。

塾に行っている間は、まだマシだ。

だが、一人になるとどうしても考えてしまう。

彼の事を。

右手で洋服の上から胸元を触ると、しゃらり、という音と、ひんやりした感覚が

伝わって来た。

ペンダントは、確かにここにある。

だが、中心の宝石が無い。

ふと、開けていた窓から風が入る。

青いカーテンがふわりと、舞う。

一瞬……

青龍の幻を見た。

もう会えないと、解っていても。

夏休みが終わった。

暑さは未だに変わらないが、暦の上ではもう秋だ。
ふと、駐輪場で涼しい風が吹いた。

「立秋…？」

彼女が今ここにいた気がした。

ひよつとしたら、本当にいたのかもしれない。

季立は四神ではないから、自由に下りて来れるのかもしれない。
それに、今の自分は霊なる者は見えない。

沙羅は笑った。

立秋のあの傲慢な態度を思い出す。

不意に、後ろから肩を叩かれる。

「よお…大丈夫か!？」

「は…？」

いきなり沙羅の肩を叩き、驚く不届き者は純しかいない。

「お前、目え真っ赤だぞ？」

「ん…そうかも…」

両手で目をごしごしと擦った。

しかし、純はその手を止める。

「止めとけ。眼球が傷つくぞ」

「うん…」

素直に手を下ろした。

純は心配そうにこちらを見ていた。

「ほんとに大丈夫だから……」

沙羅はそう言つて、教室へ逃げるように走つていった。

「あつ！！沙羅、おはよー」

教室に入ると、美佐が奥の方で手を降っていた。

「美佐：おはよう……」

無理矢理笑つて見せたが、心は泣いている。

「沙羅：何かあつたん？」

「……たぶん」

「たぶんで何よ。たぶんで」

美佐はいつものように突っ込んでくるが、苦笑いで返す。

「本当に大丈夫？」

「わかんない……」

「保健室行こつか。話し聞いてあげる」

そう言つて立ち上がった彼女を、沙羅はブラウスの袖を引っ張つて止めた。

「？」

「保健室は駄目……屋上にしよう？」

「別にいいけど……」

「体調はいかがですか？青龍様」

青龍の枕元に座つた二十歳程の女性は、穏やかに聞いた。

「……気分は悪くない」

「それはなによりです」

それは、朱雀やそれとは違う。

「つたく…頼りねえな」

薄暗い青龍の部屋の隅に腕組みをしながら壁によつ掛かっている青年は、馬鹿に

したように言った。

「そんな言い方しない。現に、神様なんだから」

襖を開けて入って来た、同年程の青年は抗議した。

「俺らだってそうだろ？」

明らかに苛立った声が部屋に響く。

「ただいまー…」

先程の青年に続き、十六程の少女が入って来た。

「お帰りなさい、立秋」

「んー…ただいま、立冬」

立秋は立冬の隣に腰を下ろす。

すると、腕組みを解いた青年が立秋の横まで来た。

「何よ、立春」

「沙羅はどうしてた？」

立春は唸るように言った。

「駄目ね。大分やつれてたわ」

「立秋に気付いた？」

「立夏…」

立冬は悲しそうな瞳を彼に向けた。

「沙羅さんは霊力を全て失ったのよ…分かる訳が…」

「気付いたわよ、沙羅」

「!？」

「もっとも、見えてはいないけれど」

「そう…」

季立は今、常人と同じ背丈だ。

四人は神界に来た時に、霊力の濃さで大きくなった。

「青龍。俺はお前を恨んでるぜ？」

立春は低く言った。

「……………」
「沙羅を傷つけやがって。本当だったら殺してやりたい位だ」
「……………済まない」

二章：第一話（後書き）

8月2日

わー！！

4000人突破ー！！！！！！

すごーい嬉しいです（泣）

毎日百人くらいの人達に来て頂いているんです！

ほんとに有り難うございますっっ！！！！！！

第二話

「で。何がどうしたって？」

「うん……」

学校の屋上で、沙羅は体育座りでうつむいていた。

「よく分かんないだ…私にも」

「失恋でもしたの？」

美佐の言葉に肩をぴくりと、震わせた。

「……そうかもしれない」

「沙羅がねえ…失恋なんてらしくない」

「そうかな…？」

膝に埋めた顔を少しあげて言った。

「そうよ。失恋したってアタックし続ければいいじゃない!」

「それも…出来ないんだ…」

「…え？」

美佐は沙羅を凝視した。

沙羅の涙が、ぱたぱたとアスファルトに染み込む。

「……って…もう会えないんだもん…」

どんなに願ったって…

どんなに叫んだって…

どんなに名を呼んだって…

彼は答えない…

もう…

会えない…

「おい、沙羅」

学校が終わり、沙羅が帰ろうとすると純が呼び止めた。

「今日家に寄っていかねえ？話したい事もたくさんあるし…」

「いい…けど…」

純の家は海に近かった。

部屋は二階で、わりと広い。

今はお昼前なので日はまだ高いが、夕方はきつと綺麗な夕焼けが見えるのだろう

と思う。

「適当に座っててくれ。何か飲み物取ってくる」

鞆をベッドに放り出して純は一階におりて行った。

「適当って…どこ…？」

沙羅は呆然と立ったまま、窓の外を見ていた。

こうして静かにしていれば、波の音も聞こえてくる。

綺麗だった。

海が限りなく深く、青く…

「何だ、座れって言ったのに」

気がつけば、純はオレンジ色に染まったグラスを二つ持ってドアに寄り掛かって

いた。

「どこに座ったらいいかわからないんだもの」

「だから、適当に…」

純は持っていたグラスを中央にあった小さなテーブルに置いた。

「本当に大丈夫か？目が真っ赤だぞ？」

「うん…へい…」

平気。そう言うはずだった。

しかし、不意に視界が失われる。

何が起きたのか理解するまでに、時間がかかった。

「じ…純…?」

ああ、と。

沙羅は純に抱きしめられていた。

きつく。優しく。

「一人で抱え込むな…たとえ霊力が失くなったって俺も和美も、愛美も…みんな心配してる…」

「うん……」

「だから…相談しろよ…俺達だって、出来る事があるはずだから…」
「うん…ありがとう…」

その後、純から色々聞いた。

青龍はだいぶ傷も治り、元気になって来た事。

季立が常人まで大きくなっていた事。

鬼は相変わらず人々の心を蝕み続けていた事。

そして、鬼は未だに沙羅を狙っている事。

「何で?私に霊力なんて無いのに」

落ち着いた沙羅はグラスに口を付けながら言った。

沙羅に、先程までの痛々しさはない。

「さあな…でも、気をつけておけよ。油断は禁物だからな?」

「うん」

すると、穏やかだった純の表情が一転した。

「純…?」

沙羅はきよとした顔で純を見る。しかし、純は静かにするよう促す。

「?」

「……ああ…来い、玄武」

靈感の失われた沙羅でも部屋の空気が変わるのが分かった。

「玄武が…『居る』のね？」

「ああ…」

「見えない。」

そこに『居る』であろう神が見えない。

「沙羅……」

純は済まなさそうに声を落としたが、沙羅の目付きはきつくなった。

「純、通訳してちょうだい！！」

「……は？」

沙羅は純の左肩の上を見た。当然、沙羅には見えていない。

しかしその場所はいつも玄武がいるところ。

「玄武、居るんでしょう？季立は…立夏達は来れないの！？」

「あ…っと…『来ても見えないだろう』…だって」

「いい。構わないわ。純か和美ちゃんに通訳してもらおう」

「…『季立は今青龍に付きつきりだから無理だろう』…だって」

「…そっか」

「あ…待て…『また今度の機会に連れてくる』…ってさ」

「本当！？」

沙羅の顔が輝く。

「じゃあ、俺達指令が来てるから…行ってくる」

「ん。行ってらっしゃい」

第二話（後書き）

神人な恋人のランキングやります！！（勝手に）
評価は必要ありませんので「一票」と書いて下さい！
また、ブログにもちよこちよこ小説載つけてます。
見に来て下さい。

第三話（前書き）

長らくおまたせしました。

（待ってないかもしれませんが）

第三話

「よお。傷はどうだ？」

無遠慮に入って来た立春を見た青龍は軽くため息をついた。

「何の用だ？」

「俺がお前に用なんかある訳ないだろ。立冬が何か話しがあるって言うからつい

て来たんだ」

「本当は一人で良いと言ったのですが…」

後ろから申し訳なさそうな立冬が顔を出した。

「話しか…手短にな…」

疲れた様子だったが、青龍は顔だけ二人に向けた。

立冬は青龍の茵に腰を落ち着ける。

立春も、青龍を警戒するようにして立冬の後ろに立つ。

「ではお聞きします。青龍様にとって、沙羅さんとはどういった存在なのですか？」

立冬の質問に青龍は軽く目を見張った。

しかしすぐに落ち着き、瞼をおろす。

「沙羅は…大切な人だ…」

「それは『主』としてですか…？」

「何…？」

青龍が聞き返すと同時に、立春が苛立った声をあげた。

「つまり、沙羅は恋愛対象じゃなかったって事だな？」

「…？」

青龍は怪訝そうな顔をした。今の話しは一体何の事なのだろう。

「青龍様の恋人は朱雀様なのですか…？」

「んな…ッ…！？」

立冬の思いもよらない言葉に、不意打ちを喰らった青龍は体を起こし

そうとする。

しかし傷に触ったのか、げぼげぼと咳込む。

「な…な…」

これは珍しい。

あの青龍がこれほど動揺しているとは。

「違うのですか…?」

立冬は今にも消え入りそうな声で尋ねた。

荒い呼吸を繰り返していた青龍は、落ち着いた様子で一つ息をついた。

「誰からそんなこと聞いた…?」

「お前が言ったんだろ?弓道場の所で」

「……盗み聞きか…悪趣味だな」

忌ま忌ましげに呟く。

「俺達じゃねえ。沙羅だけだな」

「ですから、てつきり私達は…」

「っ…」

座ったまま、前髪をかき上げるようにして顔を隠してしまう。

青龍の顔は熱を帯びたように赤かった。

「どうやら違うようだ」

「そのようですね…」

「とんだ勘違いをされたようだな…」

倒れ込むようにして、布団に横たわる。

「大丈夫ですか?」

立冬が不安げに青龍の額に手をおくと、青龍は大丈夫だと言って払った。

「詳しく聞かせろよ。納得のいく説明を求めろぜ」

立冬の横に座った立春はにやりと笑った。

「私ってこんなに暇人だったっけ？」

机の椅子に腰をかけた沙羅は誰に聞かせるでもなく呟いた。

「立秋…」

小さく呟くが、何も起こらない。

前は、勉強の合間や寝る前に季立を呼び出して遊んでいた。

『用も無えのにわざわざ呼び出すんじゃないねえ！！』

何度も立春にそう怒鳴られた。

それでも、いいじゃないと他の三人は笑っていた。

本当に楽しかった。

青龍は呼び出しても、話しをするなんて雰囲気でもない。

「みんな…」

だから、当然のように季立を話し相手にしていた。

『私達はいつも、あなたの中に居ますから。困ったら呼んで下さい』

必ず応えますから。

そう言って、立冬は笑った。

でも、今はもういない。

呼んでも応えてはくれない。

そつと窓を開けると、風が入り込んできた。

「立秋…居る…」

気配はない。

返事も、ない。

「居ない…よね…」

無性に悲しくなってくる。

「…っ…せ…」

青龍。

そう呼ぼうとした。

しかし、自分は二度とその名を呼ばないと誓った。たとえ、季立の名を呼んだとしても。

霊力を失ってからも、ずっと胸に在る。

桔梗印のペンダント。

あの時、鎖は切ってしまった。だから、今は銀色だ。

「会いたい……」

痛切に願う。

彼に会いたい、と。

第三話（後書き）

第四話

「純おはよ」

朝の駐輪場。

いつもの風景。

「今日は大丈夫そうだな。よかった」

「うん。まだ少し寂しいけど…でも、少しずつ立ち直る」

「ああ。それでいいと思う。あ、俺ちよつと職員室行ってくる」

「ん」

いつも通りの会話。

朝の風景。

そして。

いつもとは違う…

教室

クラスの男女が集まって、何かを囲むようにしている。

その中に、入り込む。

「おはよ…ってみんな何やって…」

沙羅は言葉を失った。

輪の中心にいた。

それは、つい昨日まで自分をはげましてくれていた…

「美佐…」

「きちや…だ…め…みんな…」

美佐の後頭部から、朱いものが流れる。

それは…

「美佐…どうした…の…?」

身体が震える。

何があつたの?

「みんな何してるの!?早く先生を…!」

今まで眼中になかった、他のクラスメート。

全員が武器になるものを持っていた。

「な…!」

一人の男子が、美佐に向かって野球バットを振り上げた。

「!?!」

沙羅はとっさに両手を広げ美佐を庇う。

「…っ!!止めて!!」

だが。

目は生気を失っている。

生きていない。

沙羅の防衛本能が働く。

無意識のうちに、彼の腹部を全力で蹴った。

後ろの他の生徒と共に、吹っ飛ばされる。

「は…っ…!」

怖い。

この人達は、私を見ていない。

美佐を見ていない。

「どうしたの…?みんな…何があつたの…?」

両手を広げたままの状態で、耐える。

「邪魔なのよ」

「!?!」

冷たい言葉が飛んだ。

「そ。邪魔なの」

「あんたも、美佐も」

「消えればいいのよ。二人とも」

「邪魔」

「さっさと死んで」

思考が停止した。

何故？

私？

その言葉が頭の中で、渦を巻く。

「ど…して…？」

仲間だと、思っていた。

友達だと、思っていた。

信じていた。

信じていた……

自分はこのクラスに居場所があったと。

信頼があると。

「邪魔。消えて」

身体が凍り付いたように動かない。

心も、同様だ。

女子生徒の持つ、カッターが頬を掠めた。

「……っ」

同時に切られた髪が、はらりと散る。

頬に生温いものが流れ落ちる。

「私は沙羅の親友だよねえ…？」

カッターを持った生徒が沙羅に詰め寄る。

嫌な汗が、背を伝う。

「じゃあさ、私の事を思ってさあ…消えてくれない？」

「…っ!？」

彼女の瞳が、濁っている。

死んだ魚の腹のように。

「ねえ…？」

違う…

「沙羅…」

違う。

「違う」

沙羅の表情が変わる。

「何が違うの…?」

「違う。みんなじゃない」

ぴくりと、彼女の頬が引きつる。

沙羅はしっかりと、死んだ瞳を見つめた。

「みんなの身体から出て行きなさい!!」

「黙れ!!」

「!?!」

四方の生徒が一気に刃物を振り上げる。

「…っ!!」

きつく、目を閉じる。

助けて…

「青龍!!」

刹那

青い稲妻が生徒を跳ね退ける。

「え……」

恐る恐る目を開く。

そこに居た。

たくまし背が、在った。

「青…龍…?」

「やっと呼んだな…」

第四話（後書き）

ありや。

またまたシリアス…

そういえば、世蹴さんが神人な恋人用のランキング表（？）を作ってくれました！！
参加よろしく願います！！

第五話

「うそ……夢……？」

視界がぼやける。

ああ。やっぱり夢だ。

だって、彼はもう私の元には来れないのだから。夢でもいい。

彼を見ていたのに、視界が霞む。

それは、なぜ？

「心配かけた。済まない」

背を向けたまま、言葉を発する。

懐かしい声が、耳をつく。

「沙羅さん！！」

「沙羅！！おい、大丈夫か！？」

いつもいつも……

意味無く呼び出すると、怒っていた。

いいじゃないと、笑っていた。

「沙羅！？大丈夫？」

聞き慣れた高めの声が、心地よい。

「沙羅さん……ご苦労様」

ほら。

やっぱり聞こえる。

「沙羅っ！！」

「沙羅先輩！！」

その時駆け込んで来た純と和美は目を見張る。

「何で青龍が……？」

「詳しい話しは後だ。お前達はいつらに突いた悪霊を浄化してお

け」

「はい」

和美がしっかりと返事をする。

そして、振り向く。

「沙羅」

「どうして…？」

まだ夢のような気がして。現実味がなくて。

「大丈夫か？ああ。少し出血があるな」

そつと沙羅の頬に触れる温かみがあつて。

頬に涙が伝う。

「青龍…」

「ああ」

優しい手だ。

「泣くな。お前にも、霊力が戻つたはずだ」

「え…？」

急に視界が現実味を増す。

純と和美が一人づつ、浄化の珠をかけていた。

「私…見えているの…？夢じゃない…？」

「ふざけた事を言つな。季立達も心配そつだ」

「え？」

今度は背後を振り返る。

今まで美佐を庇っていた場所。

「みんな…！！」

「この美佐つて人、傷はたいしたことないから治しておいたよ」

身長は、沙羅を越えるだろう。

立夏が微笑んで言った。

よくよく見れば、季立全員が沙羅の背を越えていた。

「みんな…背…」

「ああ。安心しろ。小さくなることも可能だ」

「う…ん…」

何を安心するのかよく分からないが、とりあえず同意した。
しかも小さい時はあまり気にならなかったが、四人の翼はだいぶ大きい。

「有翼人て事ね」

「ちよつと！私達を妖怪と一緒にしないでくれる！？」

「立秋！！」

沙羅は彼女に抱き着いた。

「なっ！！何！！」

「よかつた…前に一度来てくれたよね…？」

「…うん」

やはりあれは、気のせいではなかったと自覚する。

「青龍、全員浄化した」

険しい表情の純が、和美と共に近寄る。

「ご苦労。だが、終わってはなさそうだな」

「え？」

青龍の言葉に、全員が倒れた生徒をみやる。

「鬼だわ…」

真っ先に気付いたのは沙羅だ。

亜桔の時ような玄い雰囲気漂っている。

「ああ。新手だ」

青龍は純と和美に目配せした。

二人は無言で頷くと、二人の神を召喚した。

「おお。久しいの、沙羅」

「お元気そうで何よりです」

「お元気かどうかは分からないけれど…とりあえずはお久しぶりで
す」

複雑な思いで、沙羅は微笑んだ。

なぜなら、沙羅は未だ真実を知らないから。

「再開の挨拶は済んだか？」

青龍は一度も玄武と朱雀を見ずに言った。

「来」
「来」

第五話（後書き）

ランキングの参加を願います！！

（それでひょっとしたら話の転換変わるかも……）

第六話（前書き）

お久しぶりです…

第六話

いきなり突風が吹く。

ここは室内なのに。

「……っ」

声が、聞こえる。

まただ。

誰かが自分を呼ぶ声。

来い…

「季立つ！！私の中に全員戻って……」

そう叫ぶ否や、体が宙に浮く。

まずい。

このままでは、青龍達と離れ離れになってしまう。

本能がそう叫んでいた。

「……っ青龍！！」

とっさに青龍が伸ばした腕を掴む。

「離すなよ……っ」

ふと、風が失せる。

体が宙に放り出されるのが分かった。

「げっ……」

高い。

明らかに、地上から数十メートルは離れているだろう。

「立秋っ」

長らく使っていない霊力だったが、案外楽に再度使用することが出来た。

空中で安定感を掴んだ所で、辺りを見回す。

「青龍…?」

掴んで離さなかったはずだったが、いつの間に離れていたのだろうか。

しかし、よくよく確認すればここは学校の屋上のようなのだ。

「ご協力を願いたい」

「!?!」

背後から突然聞こえた声。

それは、何度となく呼びかけて来た男の声。

「嫌よ」

振り向かずに、答える。

振り向いてしまえば何が起きるか分からない。

「なぜそこまでして拒む?」

「私が鬼に協力する理由がないわ!」

そして、心の中で呟いた。

『立夏:お願い、青龍達を呼んで来て』

『分かった』

そう答えると、沙羅自身から青い光が放たれた。

「助けを呼んだか…」

「だって、このまますんなり帰ってはくれないでしょう?」

「そうだな…」

背後の空気が変わる。

来る。

「結界!」

そう叫んだ瞬間、何か弾き返される。

「なかなか…さすがですね。だからこそ、あなたの力が欲しい…」

「うるさい!!」

ねっとりした声に気分を害し、立冬を放つ。

初めて見る。

本物の『鬼』を。

「ほう…季立を使うとはあなたらしい…」

にたりと笑った鬼に悪寒を覚えた。

鬼と呼ばれるのは、違つかもしれない。

その『鬼』はあからさまに美しかった。

なるほど。

「いやいや…なんとも」

効いて、いない。

立夏は使いに出してしまったから、攻撃は出来ない。

ならば…

「立春！！」

碧の光が鬼目掛けて放たれる。

その時、下の方でドアを破壊する音が聞こえた。

「沙羅！！」

「みんな……」

それは、一瞬の油断だったかもしれない。

鬼が沙羅自身の中に居る、立秋をたたき落とした。

『きゃあっ！！』

「な……っ」

ふと、バランスを崩す。

宙に浮いている事が出来ない。

「やば……っ」

落ちる……！

しかし、衝撃は来ない。

地面にたたき付けられる前に、青龍が沙羅の腕を引っ張ってそれを救った。

「青龍…立秋が…」

「大丈夫だ。玄武が行った」

「そう…よかった…」

沙羅が安心したのを見てから、青龍は鬼を睨んだ。

しかし、それに臆す事なく鬼は笑った。

「はじめまして。紹介が遅れましたね…私は龍と申します」

「貴様が『龍』だと…？笑わせるな。龍の力がどれほど強い力なのか知っている

のか…？」

恨めしそうに青龍は低く唸った。

それに対し、鬼はさらに楽しそうに笑った。

「ええ。存じていますとも。だから私は『龍』ですよ…青龍…」

一瞬

鬼の姿が失せた。

第六話（後書き）

おまたせしました（？）

展開は再会となりました。

青龍さん、一体どうしたんでしょ？

第七話

「……………青龍」

沙羅は彼の衣をきつく掴んだ。凄まじい靈力に耐えられない。自分達の目の前に居たもの。

それは…

「『龍』」

沙羅の呟きに、青龍はいらついたように舌打ちした。眼前に現れたのは、赤い衣で体を被われた巨大な龍。靈気が、熱い。

すると下で、さらに熱い熱気がほとばしる。

「な……………」

沙羅は目を疑った。

それは、自分達の真横まで羽ばたく。

「和美に負担がかかるぞ、朱雀」

例えて言うのならば、巨大な鳥。

赤く、熱い。

朱色と黄色の混ざった全身を被う羽毛。

「朱雀…なの…?」

「ああ。あれが、朱雀の正体だ。あいつは火神だから」

青龍の声は重く響く。そして、続く。

「四神は主の力を要して本物の力を成す。だから和美には相当な負担がかかるだろっ」

鬼と朱雀の靈力が熱風を発生し、青龍と沙羅の黒髪を舞い上げる。ゆっくりと下降し、屋上に足をつく。

「朱雀が妖化した。お前はとうする?青龍」

穏やかな声とは裏腹に、厳しい表情をした玄武が言った。

「無論だ」

青龍はきつぱりと言った。

しかし、玄武は静かに聞き返した。

「それが沙羅殿に大きな負担をかけるとしてもか…？」

「ああ」

そうして、沙羅と視線をぶつけた。

沙羅は少しだけ瞳を伏せると、決心したように瞳を開く。

「負けないわよ。私」

力強く笑って見せる沙羅を穏やかに見つめ、妖化した朱雀を見た。

彼女の熱が、熱い。

「行くぞ」

短く青龍は告げた。

途端

熱さを通り越し、冷たい程の霊力が爆発した。

沙羅も季立を放った後に、更なる力を解き放つ。

『冷たい……』

青龍の凄まじい霊力に直接触れた沙羅は、不意に理科の授業を思い出した。

『炎は赤よりも白、白よりも青の方がより熱い……』

だからか。

だから、朱雀よりも青龍の方が熱く、強い。

青龍の『青』はいつも冷静であろうとする理性と、本当のチカラ。

故に、力を抑える必要だったのか。

だったら……

「力を貸すわ……」

爆発的な霊力を青龍に受け渡す。

青龍の姿が、変わる。

青銀の龍へと。

「……………つく……………!?!?」

唐突に沙羅の身体に激痛が走る。否、身体だけではない。心もだ。

「沙羅は…大丈夫か?」

純がそう呟くのが聞こえた。玄武に尋ねているのだろう。

そんな事を頭の片隅で考えながら苦痛に耐える。

和美も同じようにこの痛みに耐えているのだろうか。

歯を食いしばり、拳をにぎりしめる。視界の中で青銀の龍が空に舞い上がるのが

分かった。

すると、純が沙羅の肩に手を置く。すつと、身体の痛みが引く。

「半分、俺が引き受ける。だから、大丈夫だ」

「ん……………ありがとう……………でも、和美ちゃんは……………」

「見る。ほら……………」

第七話（後書き）

お久しぶりです。

久々の更新で、少し戸惑っております…

感想など頂けると、早々な更新が望めるかもしれません（笑）

第八話（前書き）

ども…

お久しぶりです。

第八話

視線の先。和美の傍らには、沢の姿が。

いつの間に。その言葉は声にならなかつた。

ただただ、『仲間』の意味を噛み締めていた。

「玄武と…白虎は…？」

「妖化はしないんだと。俺らに負担をかけたくないらしい……」

俺、そんなに弱くみえるかなあ、と呟く純を見て沙羅は微笑む。

この『仲間』という絆が永遠に在れば良いのに。そして、『四神』という『仲間』が。

「ほら。大丈夫だろう…俺達だって……青龍だって居る……」

「うん…分かつてる……」

そうして、空を仰ぐ。

二匹の龍、そして巨大な鳥が対峙している。

途端に、青龍が鬼に噛み掛かる。必死に身じろぐ赤い龍は声ともならない悲鳴を上げた。

その時だった。

沙羅は『鬼』から、何か違うものを感じ取った。よく解らない感情。

これは、何？

そう……

「悲しんで…いるの…？」

沙羅の呟きに、純は目を見張った。

「聞こえているんでしょう…？ねえ…やっぱり悲しんでいるの…？」
夢だ。

夢で聞いた声は確かに悲しんでいた。それは気のせいではないはずだ。

「何に悲しんでいるの…？寂しいの…？」

ふらりと、沙羅の体が純の手の届かない場所に行く。

「おい……」

手を伸ばして彼女を取り戻そうとする。しかし、腕が上がらない。沙羅自身がそれを望むかのように。

「沙羅…先輩……」

和美の小さな声が聞こえたか。だが、沙羅の耳には何も入らない。聞こえるのは、別の音。悲しみに溢れた、声だった。

『なぜ…私はそこまで無力ではない……！』

真つ暗な世界で。

あなたはこんな事を望んだ訳ではないの…？

『神になる資格が無いと言っのか…審神よ…！』

そうか……

本当は救いたかったのね。

悲しむ人間を。

涙を流す人が居なくなるように。

「もう……あなたは泣かなくていいよ……」

沙羅が纏う雰囲気が一変し、柔らかく、優しい。癒すような、力だ。その力に煽られ、長い髪が翻った。

前髪の下から覗いた瞳はいつもの漆黒のそれではない。深い、蒼だ。「いいよ。泣かなくて。本当は違っんでしょう？こんな事、したくないでしょう……」

沙羅の変化を察した青龍は龍のまま、彼女を背に乗せた。

朱雀も鬼への攻撃を休め、青龍の隣にならぶ。

沙羅は赤い龍の黄金の瞳を見つめる。綺麗な色を、している。

「認めて欲しかった。そうよね？解って欲しかった。だから……力を求めた……」

黄金の瞳が、揺れる。

もう彼に殺気はない。有るのは悲しみと虚しさだけだ。

「一緒に……帰ろう……？元在る場所に」

瞬時に赤い龍が消え失せ、落下する人影が目映る。

「やば……っ……」

沙羅は咄嗟に立秋を放つ。しかし、それは更にまずかったと悟った。今は青龍を妖化するために霊力を解放していたのだ。そのため、季立を使つてし

まえば明らかに霊力不足となるだろう。

「きゃ……っ……」

予想は的中。

一瞬、体が中に浮く。次いで、落ちる感覚。まずい。かなりやばい状態だ。

なにしろ、青龍も疲れているはずだからだ。

第八話（後書き）

いやはや。

全く持って、話の進みが遅い。
すみません。

受験生何でお許し下さい。あう…

それはそつと10月16日確認…

一万人突破!!!!!!!!!!!!

有難うございます！

これからも、もう少し続けようと思うので…
よろしく願います！

第九話

だが、沙羅の体は優しくま力強い腕に抱き留められた。

「青龍：ありがとう……」

「あまり無茶はするなよ」

沙羅はしっかりと彼の瞳を見る。深く、蒼い。

ゆっくりと屋上に着地すれば、純達が心配そうに駆け寄って来た。

「大丈夫か！？って言うか、あの鬼……」

純の指差す方を見れば、立秋が鬼を屋上に下ろしていた。

漆黒の瞳に戻った沙羅はそっと歩み寄ると、瞼を閉じた鬼の額に優しく触れる。

すると、僅かに目が開き、金の瞳が揺れた。

そんな沙羅と鬼のやり取りを、全員が黙って見ていた。

沙羅は鬼の隣に腰を下ろし、その前髪に触れてやる。

「なぜ……分かった……？」

「なんでだろうね……あなたの記憶……気持ちが分かったから、かな

……」

「き……もち……？」

おぼつかない舌で、彼は小さく呟いた。小さすぎる声は、沙羅だけに届く。

鬼は自分の前髪を撫でる沙羅の手に、自分の手を添える。温かく、優しい手だ。

「名前は？あなたの名前。教えて……」

沙羅は彼の耳元で囁いた。

「俺の名前は……きさらぎ……如月だ……」

「如月……良い名前ね……」

如月は、ああ、と言って安心したように瞳を伏せる。そして、動かない。

「……………っ……………」

ぱたりと、未だ温かい如月の頬に一筋の涙が落ちる。彼の天命はとうに尽きていた。彼を生かしたのは、念だ。

「さよなら……如月……」

哀れな神よ。

「よくやってくれたな、四神とその主らよ」

審神は厳かに告げる。だが、沙羅達の表情は暗い。

今、沙羅、純、和美、沢そして四神は神界に居た。

「どうした？何か不満な事でもあったか？」

「審神：どうして神として育てた者を『神』として扱わなかったのですか？」

沙羅は俯いていた顔を上げ、漆黒の瞳で審神を見据えた。挑戦的な光を放っている。

「如月の事かな？」

低く、しかし穏やかな声が耳朶に響く。

「如月は…強すぎたのだよ、沙羅。あやつは死者さえもを蘇らせてしまう力だった」

息を呑む音が緊迫した空気に染み渡る。沙羅は無意識に青龍の袖を掴んでいた。

「危険だったのだよ。あまりにもね…人間に泣いて欲しくないと、生命の理を侵してはならない」

「生とは、失われて行くものだ。安易に覆してはいけない」

審神の言葉を受け持ったのは青龍で、沙羅はその瞳を凝視する。すると、今までの空気を覆すように審神が明るく言う。

「さあさあ。四人の姫と帝よ。疲れたであろう。今日は神界でゆるりと休んでくれ」

気が重い。

「本当にこれでよかったのかな……」

薄暗い青龍の部屋に、沙羅の問いが満ちる。

「よかったのだと思う。それに如月は沙羅、お前に救われた」

「そう……かな？」

「ああ」

そっか、と呟いた後で沙羅は小さく笑った。

「そういえば、さ……青龍、朱雀の事好きなんでしょ？」

「……その話しか」

いらついたように舌打ちしてから、青龍は沙羅の瞳をじっと見つめた。

「それは誤解だ、沙羅」

「誤解……？」

「俺は生涯、愛する者は違えない。それは……」

青龍の言葉が途切れると同時に、目の前が彼の蒼い衣色に染まる。きつく、抱きしめられていた。

「お前だ、沙羅。お前が生まれる前から、ずっと愛している」

思いがけない彼の言葉に、沙羅は泣きそうになった。それを堪えながら、衣にしがみつく。

「……本当？」

「ああ。本当だ」

消え入りそうな声に答え、青龍は体を離した。

そして、どちらからともなく自然に唇が重なった。

「ありがとう……」

第九話（後書き）

うーん。

とりあえず的な話しは終了…
と思います。

多分。

第十話（前書き）

最終章です。

最後までどうなったか、どうぞご堪能ください。

第十話

翌日、それぞれの神の部屋で休んだ主たちは、再び神審の部屋に座していた。

話があると言う。

「何だろうね、話って」

沙羅が隣の青龍に語りかけると、彼は反射的に目をそらした。

一体どうしたと言うのか。

「待たせて済まない」

一言だけ告げ、入ってきた審神はいつもとは全く違う着物を纏っていた。

一目見るだけで、絹と分かる布を肩から掛け、その下の着物は紫だ。ところどころに何か文字が書いてあった。

「おい。話って今後の事か？」

審神が口を開くよりも早く、純は言った。和美は隣の朱雀の着物を握りしめている。

何となく、分かっていた。

この後の事が。

「人間である君たちを巻き込んでしまったことは、審神の私が深く詫びる。済まなかった。そしてその礼というのも何だが……」

その場にいた人間全員が先の言葉を待った。だが、四神は俯く。

しばらく沈黙が続いた後で、重い言葉が紡がれた。

「四神の主たちの記憶を全て無くしてから人間界に戻そう」

「な……！」

純は絶句した。沙羅たちも同様だ。

「止めて下さい！お願いです！私、朱雀を忘れたくない……」

和美は泣き出す寸前で叫んでいた。彼女の言葉に、沢も言葉を重ねる。

「俺も…白虎と過ごした時間は短かったけど、忘れたくない大事な

思い出だ。俺達の記憶を勝手に消さないでくれ……！」

だが、その言葉にさえ審神は無情にも首を横に振った。
和美は泣き崩れていた。

無理もないだろう。姉のように慕っていた相手だ。
過ぎた時間は短いが、その中身は色濃いものだ。

「この事を覚えていれば、いずれ人間としての未来に影響してきて
しまう。記憶は全て消させてもらう」

四神は最初から知っていたのだ。「鬼」を滅した後にどうなるかを。

「俺達から大事なものを奪わないでくれ……」

純の消え入りそうな声が、俯く沙羅の耳に届いた。

しかし、沙羅は沈黙を続ける。

自分がどうこう言っても、何も変わらないと分かっていたから。

それに、季立も分かってくれている。そう信じていたから。

「済まない…………」

審神の声を聞いたのはそれが最後だった。

ふ、と意識が飛ぶような感覚に捕らわれたから。

体から力が抜ける。

最後に視たのは、蒼い空だった気がする。

本当に深い蒼。

それが何だか分かったから、呟いた。

「青龍……愛してる……」

晴天。

抜けるような青空だ。

そこに、長い黒髪を風に遊ばれる一人の女性が居た。

「晴れて良かったわ：雨でも降ったらどうしようかと思っただけど」
五年前と何ら変わりのない校庭を見下ろしながら、彼女は一人で
呟いていた。

彼女の服装は、薄い青の膝丈ドレス。正装だろう。

そして、右手には一枚の手紙。

宛名は「渡辺 沙羅様」。

「しかし、あの沢が和美ちゃんとねえ……いろんな意味で親戚にな
っちゃったのね」

大きく背伸びをした後で、もう一度手紙を読み直す。

何度読んでも笑みがこぼれてくる。

『六月十四日 このたび私達、結婚式を挙げる事になりました。

荒井 和美

渡辺 沢 』

いつからそんな関係になっていたのかと、純は電話で沢に聞いた
だしたらしい。

それ以前に、純と沢の繋がりを疑問に思っべきではないのだろう
か。

「まあ、それも有りかなって思うけど」

そんなこと言ったら、純と愛美ちゃんだってもう付き合って四年
になるんだから、さっさと結婚しちゃえばいいのに。

沙羅は今日の式で、笑いながら純と愛美に言っただけだ。

覚えているのだ。全て。

沙羅にとって、あれは夢ではない。

審神も季立も四神も、実在していた。

純や和美や沢、それから愛美までもが忘れていたけれど。

ペンダントは、無い。

だが、全ては沙羅の記憶、思い出、そして一生残るであろう傷が、在る。

それだけで十分だ。

純達に、思い出させるような事も言っていない。

思い出したってしょうがないし、思い出せないだろうから。

「でもさ。私、このまま結婚するつもりないよ？消すならちゃんと消してくれなきゃ。本当に結婚できないじゃない」

軽いため息をつき、空を仰いでみる。

やはり、彼の名前は呼んでいない。

でも今日だけは。

今日だけだったら、呼んでも良いと思う。

「ねえ……青龍……」

ふわり、と。

背後で風が動いた、気がした。

「全く、青龍ったら。こうなること知ってたんだったら言ってくれればいいのに」

フェンスに頬杖をついて、文句を言ってみたりする。
仕方のないことだけれど。

「青龍の馬鹿……」

「馬鹿で悪かったな」

「は？」

思わず素っ頓狂な声があがってしまった。

屋上には、沙羅一人のはずだ。それがなぜ。

「せっかく名前を呼ばれたと思ったら、馬鹿とは」
振り返るのが怖い。

これが幻聴だったら？

声さえも消えてしまったら？

「何だ？人を呼んでおきながら」

硬直した沙羅は背後から、抱きしめられる。

このぬくもりさえも、幻覚か？

そんなことはない。

「青…龍…？」

「何だ？」

ぬくもりが、離れる。

それを追うようにして振り向いた。

「あ……」

沙羅の瞳は確かに、青龍を捕らえた。

だが、それは五年前とはだいぶ違っていた。

長かった髪は肩の上まで切られているし、瞳も黒い。それに、着物ではない。洋服だ。

「どう…して…？」

「審神に頼んだんだ。人間にしてくれと」

黒い瞳でさえ、蒼く見えて。

「沙羅の記憶が消えなかったから、人間になれた」

抱きつく。二度と離れないように。

ぬくもりが、消えてしまわぬように。

「お帰り、青龍……」

鼓動の…

生きている音がする。

「ただいま、沙羅」

第十話（後書き）

「神人な恋人」終了です。

ああ、終わってしまいました…。

この後、後書き・番外編で締めくくりたいと思います。

後書き

こんにちは。

お久しぶりです。

書き始めてからかれこれ七ヶ月。

ああ…

長かった。

途中で改名しちゃったし…。

でも書いてて楽しかったです。

特に純とか玄武とか。

でも、やっぱり一番愛着あるのは沙羅ですね。

書きやすかったなあ…

目一杯可哀相なことしたけど…（汗）

初めはこの話もっと長くなる予定だったんです。

事情により短くなりましたが。

もっと沙羅と青龍ラブラブさせたかったなあって思います。

でも、シリアスは私の性なんで…

変えようがないんです。

困りますよね…

ほとほと困っています。

えと、評価で質問頂きました。

・青龍と朱雀の関係は仲間です。

お友達でしょうか。恋仲ではないです。
多分、

「二度と離したくない」

「青龍…」

青龍をなだめるような朱雀の声も、困っているようだった…

「愛してるんだ…朱雀…」

つてとここで勘違いされた(させられた)人がほとんどだと思います。

じゃなきゃ困る。

これは「沙羅を離したくない」「沙羅を愛している」って事です。
別に朱雀を愛してるわけじゃないんです。

ここでぶっちゃけると、朱雀の恋人は玄武です。
原作では出てきませんでしたが、そうなんです。

・沙羅への青龍の思いは、前世からです。

ずっと好きだったんですね。

番外編でちらっと書いたことがあります。

個人的には立秋とか大好きだったんだけどなあ…

あの性格w

実は、これの続編書こうかななんて思ってます。
青龍と沙羅の子供みたいな感じで。

最後に…

こんなに長々と小説書きましたが、読んで下さった方々、有難うございました。

毎日読者数確認して「ああ、読んでもらってるんだなあ」って思っています。

評価をくださった方。

とっても励みになっています。

こんなにうれしい事って無いですよ！

それでは、何はともあれ…

これで神人な恋人は終わりですが、他の小説も更新頑張っています。よかったら読んで下さい。

ここまで読んで下さって本当に有難うございました。

Put the feeling of thanks from

Miya Arisawa…

Thank you very much .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4893e/>

神人な恋人

2010年10月9日18時11分発行